STORY Ⅱ

日本海交流が発展する古代・中世

紀元前10世紀後半（約3,000年前）ごろに、大陸から北部九州に伝わった水田稲作は、約2,700年前ごろには島根県に伝わってきます。弥生時代の始まりです。ストーリーⅡでは、弥生時代から平安時代の終わりごろ（11世紀後半）までを古代、そして戦国時代が終わりを告げる関ヶ原の戦い（1600年）までを中世として、松江周辺の人々の生活や社会と水との関わりをお話していきたいと思います。

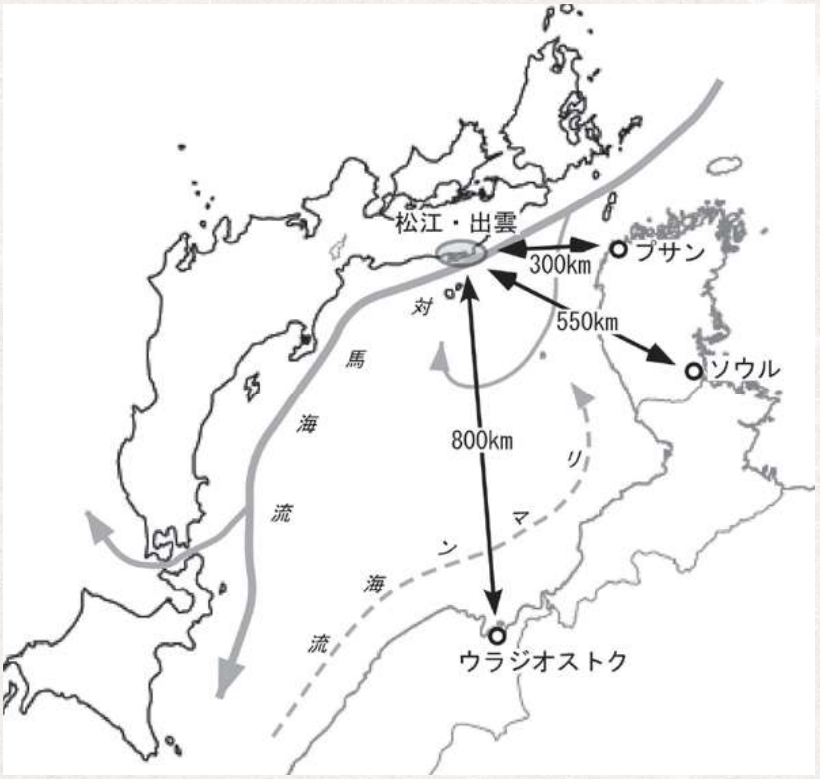
古代から中世の簡易年表

時代区分		時期細分	年　代	出来事 茶色字は地元の出来事
縄文時代	先史		1万6千年前頃 6千年前頃 4千年前頃	土器を作り始める 縄文海進のピーク 三瓶山が大規模に噴火
弥生時代	古代	早　期	BC10世紀後半	水田稲北部九州に伝来
		前　期	BC8世紀後半	松江に水田稲作伝来 金属器渡来
		中　期	BC350年	田和山遺跡最盛期
		後　期	50年	青銅器埋納 大型四隅突出墓築造
古墳時代		前　期	3世紀半ば	箸墓古墳築造 松江で前方後円墳築造開始
		中　期	4世紀後半	倭の五王中国に遣使 出雲東部の首長墳が前方後方墳となる
		後　期	6世紀初め 6世紀終わり	山代二子塚築造 前方後円墳築造停止
飛鳥時代		終末期	7世紀初め 645年 7世紀終わり頃 701年	遣隋使派遣 大化の改新 出雲国府おかれる 大宝律令
奈良時代		前　半	710年 720年 733年	平城京遷都 『日本書紀』編纂 『出雲国風土記』編纂
		後　半	743年 784年	墾田永年私財法制定 出雲国分寺建立 長岡京遷都
平安時代			794年	平安京遷都
			894年	遣唐使の廃止 藤原氏の摂関政治
			1085年 1167年	白河院制始まる 平清盛太政大臣となる
鎌倉時代	中世		1185年 1232年 1274年～	平家滅亡 御成敗式目制定 元寇
南北朝			1333年 1343年	建武の新政始まる 佐々木道誉出雲国守護就任
室町			1399年 1467年	南北両朝合一 応仁の乱始まる
戦国時代			15世紀後半 1578年 1582年 1591年 1600年	尼子経久活躍始まる 尼子氏滅亡 本能寺の変 吉川広家冨田城主となる 関ヶ原の戦い
江戸時代	近世		1603年 1607年頃	徳川家康征夷大将軍となる 堀尾吉晴松江入部

1．弥生文化と水

⑴ 水田稲作の到来から古墳の始まりまで

水田稲作の到来と広がりは、狩猟・採集を中心とした生活を大きく変えていきます。特に約2,400年前に朝鮮半島から伝わった金属器（青銅器・鉄器）は、海路を中心とした交流や交易の重要性を高めていきました。特に対外交易には地域を結集して代表者を立てる必要が出てきます。紀元１世紀ころには、中国と「国王」を名乗って交易する人物が現れ、３世紀中ごろには倭国（わこく：のちの日本のことを中国王朝が呼んだ国名）を取りまとめた、女王卑弥呼をいただく邪馬台国が登場し、古墳時代が到来します。現在の島根県東部も、邪馬台国連合に含まれていたものと考えられます。



南を上にして見た日本列島とユーラシア大陸
（島根半島と大陸の近さが実感できる）

⑵ 弥生文化の始まりと松江

松江北部での弥生文化の始まり　松江周辺に水田稲作が伝来するのは、本州でも最も早い段階です。北部九州地方に伝わり、定着したのち、日本海沿岸を通じて弥生人（水田稲作を生業とした人たち）が、島根半島に上陸したものと考えられます。鹿島町古浦（こうら）海岸の砂丘上には、弥生時代前期の墓地が作られており、その上流の講武平野の北講武氏元遺跡では浅い溝から弥生時代前期前半（約2,700年前）の土器が出土しています。おそらく、最初の弥生人たちは古浦海岸から上陸し、講武（こうぶ）平野で稲作を行ったのでしょう。谷奥からの湧水から水路を作って水を引き、水田に流しいれる灌漑水田が営まれたと推測されます。

西川津町の西川津遺跡でも同じ時期の資料が出土しており、間を置くことなく水田稲作が松江市北部地域に広がったものと考えられます。

弥生時代前期前半の遺跡分布図（出雲沿岸部）
（松江市2021より転載）

大陸とのかかわりと松江南部への広がり

紀元前500年ごろ（約2,500年前）の弥生時代前期後半になると、西川津遺跡はさらに発展して環濠集落を作るとともに、大橋川南部でも竹矢町布田遺跡で大きな集落が展開します。大陸由来のお祭りの楽器・土笛が多く出土するとともに、緑色凝灰岩（りょくしょくぎょうかいがん：火山灰が水中で固まった軟質の石）を使った玉作（細い管玉）が行われるなど、他地域との交流や交易が盛んになってきたことがうかがわれます。管玉を連ねて装飾品とする文化は縄文時代になく、大陸から伝わってきた文化です。その製作が山陰から始まったことになります。

浜乃木町友田遺跡出土管玉

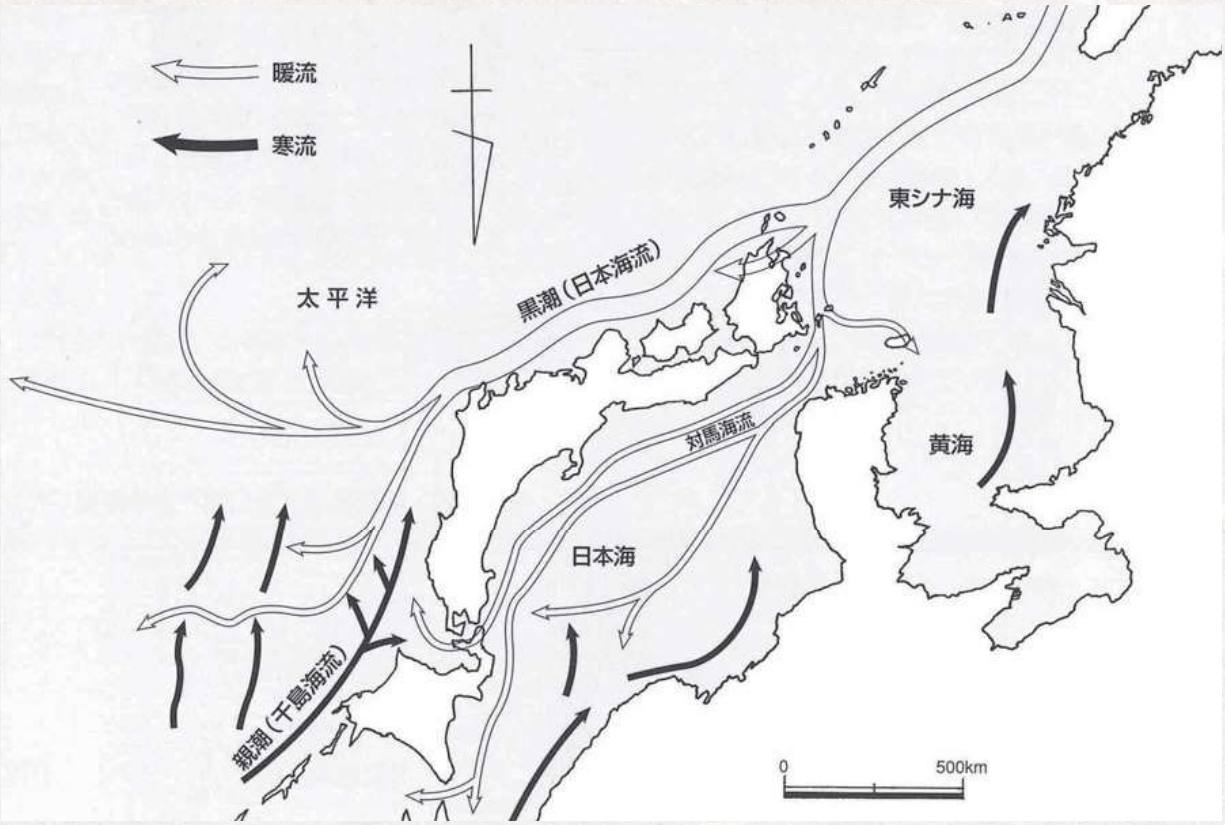
当時の交通は、宍道湖・大橋川・中海の内水面から日本海に抜けていく水上交通が中心だったと考えられます。日本海へは、境水道を抜ける東西の水路のほかに、湖北の内海（佐太水海）から恵曇周辺にあった池にぬける、標高差の少ない南北の道筋も重要だったと考えられます。このルートは江戸時代に開削され、佐陀川になりました。拠点的な集落の鹿島町佐太前遺跡が、日本海に抜ける河川と宍道湖に抜ける河川（佐太川）の分水嶺付近に登場するのがこの時期です。

田和山遺跡の登場と遠隔地交流の活発化　紀元前４世紀の終わりころ（弥生時代前期末）、松江市南部の乃木地域の丘陵上に田和山遺跡が成立します。田和山遺跡は、松江市乃白町の標高約45mの山にある遺跡です（松江市立病院の隣）。狭い頂上平坦面には住居跡はなく、掘立の柱、もしくは建物跡が見つかっているだけですが、その周りに環壕を巡らせている珍しい遺跡です。環壕とは、山の斜面に溝を掘り、掘った土を溝の外側に土塁のように積んだ、水はたまらない堀のことです。

上：田和山遺跡（手前）と神後田遺跡（右上）
下：発掘後の田和山遺跡航空写真

はじめは一重の環壕で、向かいの低い丘にある神後田（じごで）遺跡にも一重の環壕がめぐらされています。二つの丘がセットになって、宍道湖からよく見えるシンボリックな景観だったと想像されます。

やがて紀元前２世紀後半（弥生時代中期）ころ、田和山遺跡では環壕は三重にめぐらされ、一つの壕の規模も大きくなります。湖上



南を上にした日本列島と大陸の地図
（海流を重ねると島根半島と大陸の関係の強さが実感できます。）

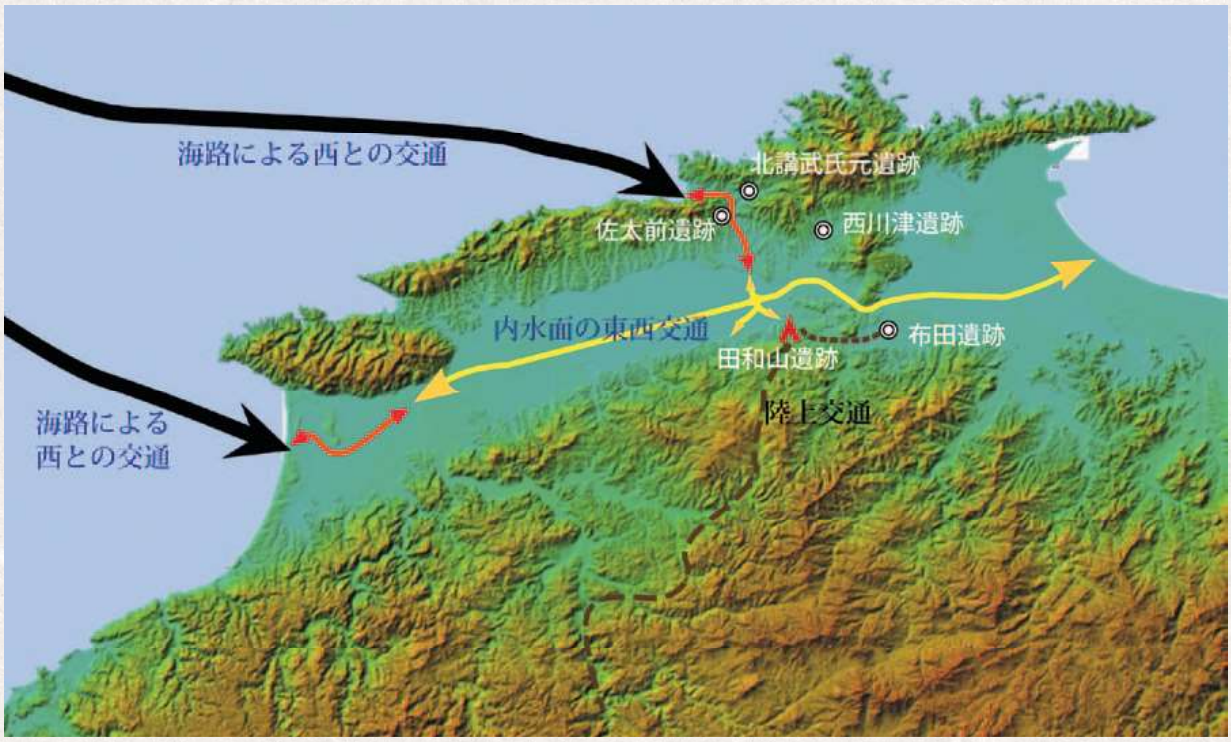
弥生時代の山陰と九州・朝鮮半島
（松本岩雄2021より）

から見ると、大規模な土木構造物に見えたことでしょう。環壕の中からは、銅剣を模した石の剣、たくさんの石の鏃や農耕用石器、土器、硯（すずり）と考えられる板石などが出土しました。日常の品々に交じって、祭りの道具や武器、文字を書くための硯など、特殊な品が含まれていることが重要です。特に硯は朝鮮半島に置かれた漢の出先機関・楽浪郡（らくろうぐん）から出てきたものとよく似ており、注目されます。

弥生時代の社会に文字を書く習慣はなく、交易（商業活動）での数量や対価の確認のための特別な文字利用が想定されています。当時の文明の先進地である大陸や北部九州から島根半島に、交易を目的に人々がやってきて、田和山を目印に入港したものと推理します。出雲地方西部や古浦海岸を入り口に宍道湖に入ってきた舟からは、田和山遺跡はとても目立ったモニュメントだったと考えられます。特に田和山が最盛期を向かえる弥生時代中期後半ころは、貴重な鉄の流通が山陰でも盛んになる時期ですので、大橋川南部地域の交流の拠点として栄えたものと考えられます。

弥生時代の舟（準構造船）の復元図
（鹿島町稗田遺跡出土舟材をもとに復元）

佐陀川河口（北）から見た田和山遺跡（赤線）



弥生時代前期後半頃の出雲沿岸部　他地域の交流と内水面交通模式図
（出雲西部の潟湖入り口と古浦海岸が西からの主要な出入り口となり、地溝帯を船越もしくは積替えをして宍道湖に入る 。）

⑶ 有力者の出現と古墳の築造

青銅器の埋納　出雲では荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡で大量の青銅器が埋納されたことが有名です。松江市内でも青銅器は発見されており、鹿島町志谷奥遺跡では銅鐸が３個、銅剣が６本見つかっています。青銅は中国華北産と言われ、とても貴重なものですから、弥生時代の出雲には相当に強い勢力があったといわれます。強力な地域だったかどうかは横に置いても、それだけの青銅器が集積されたり、作られたり（銅剣は出雲で作られたとの説が強い）したとすれば、やはり日本海を通じた各地域との交流が「青銅器王国」と呼ばれるほどの大量の青銅器を保有できた背景なのでしょう。

荒神谷遺跡銅剣356本出土状況
（古代出雲歴史博物館提供）

志谷奥遺跡出土の銅鐸と銅剣（銅鐸のうち１個は破片）
（古代出雲歴史博物館提供）

　青銅器を使ったまつりは、当時の村々の集合体が主体となって、行われたものと考えられています。この青銅器祭祀が行われている弥生時代前期末～中期初頭（紀元前４世紀はじめころ）から中期末ごろ（紀元前後ころ）は、田和山遺跡の存続期間と重なることも注目されています。村々のつながりを示す象徴的器物だった可能性もあります。

四隅突出墓の出現と大型化　さて出雲で青銅器の祭りが終わりを告げたころ、四隅突出墓と呼ばれる独特な形の墳墓（一定の範囲を高まりとして造成し、その上に墓穴を設けるもの）が山陰地方を中心に現れます。この墳墓は、村と村を統合させた有力者の墓と推定され、中国の史書に記載されているような地域のまとまりが、特定の権力を持つ人のもとで生まれてきたことを示しています。

やがて弥生時代後期後半（２世紀後半ごろ）には、現在の出雲市西谷墳墓群と安来市荒島墳墓群のなかに、差し渡し40mをこえる全国的にも大型の四隅突出墓が作られます。島根半島の東西に作られたこれらの墳墓は、島根半島の出入り口として他地域との重要な交流拠点でした。同時に四隅突出墓は山陰を越えて、北陸地方にまで築造の範囲を広げます。日本海を通じた広域の交流があったことは間違いありません。大型の四隅突出墓の中で、内容がわかっている出雲市西谷３号墓では、葬られる人を墓穴の中の木棺に入れ、さらにその周りを木の囲いで護った木槨（もっかく）を作っています。この葬り方は中国や朝鮮半島に見られるものです。また木棺の床には中国産の大量の朱がおかれ、大陸産のガラス勾玉が副葬されていました。大陸、特に中国との関係性のなかで作られた墳墓と考えられます。

また西谷３号墓と同じころ、中国山地を超えた吉備地方に日本列島最大級の弥生墳墓の楯築（たてつき）墳墓が作られています。西谷３号墓と同様の構造の木槨と木棺内には大量の朱、玉類や剣の副葬など、両者の関係はとても深いものと考えられます。そして、吉備地方独自の葬送祭祀用の

西谷３号墓出土の玉類
（古代出雲歴史博物館提供）

西谷３号墓出土の吉備の土器
（古代出雲歴史博物館提供）

土器、特殊器台と特殊壺が西谷墳墓群をはじめ、出雲全体にもたらされています。このころの吉備は出雲を通じて、朝鮮半島から鉄を入手した、という説もあり、日本海側にあって大陸と交流・交渉をしていた出雲地方の重要性がうかがえます。

　このころ松江では、10m～20m程度の中型・小型の四隅突出墓が、小地域ごとに造られています。広範囲での地域の結合は不十分で、各地の有力者がそれぞれに墳墓を造っていたようです。当時は出雲沿岸部の中央部にあって、島根半島出入り口であたる西（現在の出雲市）と東（現在の安来市）に盟主の位置を譲っていました。しかし後々この中央部にある地勢が松江周辺の出雲での地位に大きな影響を与えることになります。

松江市間内越１号墓の突出部

邪馬台国の時代と出雲　節の冒頭に述べたように、弥生時代の終わりごろ（３世紀前半）には、それまで小さな地域的まとまりが各地にあって競合していた日本列島で、宗教的な権威の代表として女王卑弥呼（ひみこ）を各「国」が共に立て、邪馬台国という日本列島の大きな部分を治める連合体ができました。中国の正史『魏志倭人伝（ぎしわじんでん）』に記載されたその所在地については、長年論争が続けられています。近年では邪馬台国が近畿地方中央部ヤマト周辺で、朝鮮半島の帯方郡からの行程で最初のあたりに出てくる国々が北部九州、邪馬台国に行く途中で記載されている大国の「投馬（とうま）国」が出雲もしくは吉備、という考え方が強くなってきています。投馬国は北部九州の「不弥（ふみ）国」から水行二十日、投馬国から邪馬台国まで水行十日陸行一月（舟で行けば10日、陸上を行けば１月）とありますので、日本海を行けば出雲、瀬戸内海を行けば吉備、という解釈が一般的です。あるいは両方の地域を合わせて一つの国と言っているかもしれません。いずれにしても、出雲は邪馬台国連合に含まれていたと考えて差し支えないと思われます。

古墳時代の到来　３世紀の中ごろ、奈良県大和盆地の南東に全長280mと、弥生時代の墳墓とは隔絶した巨大前方後円墳、箸墓（はしはか）古墳が築かれました。魏志倭人伝には「卑弥呼、以って死す。冢を大きく作る。径は百余歩なり。」と記されています。箸墓古墳と時期もおおむね一致することから、卑弥呼の死をもって巨大古墳を築く習俗が始まったと考える説も有力です。これから後、東北南部から九州に至る広い地域で、前方後円墳をはじめとする古墳が築かれます。古墳時代の到来です。前方後円墳を代表とする古墳は倭（わ）国の一員として、ヤマトの王権と相互のつながりを認め、認められる関係となった証として築かれたと考えられています。ヤマトを核にして、地域の有力者同士が広い範囲で連合したあかしともいえるでしょう。

東出雲町寺床１号墳の埋葬主体
（長い割竹形木棺の周りに円礫を詰めています。）

３世紀後半から４世紀初めころの出雲

弥生時代後期後半以降、宍道湖・中海の東西に大型の四隅突出墓が造られ、島根半島の入り口に有力集団が生まれていました。古墳時代になると、東の入り口にあたる安来市荒島で大型の古墳が築かれるようになります。近畿地方に近い東側が優位な位置に立ったとも考えられますが、西の出雲平野側で人口が減少するような変動があったとする説もあります。

出雲の前期の大型古墳は、平面形が四角い方墳が基本です。遺骸を葬る主体部には割竹形木棺の周りに竪穴式石槨（たてあなしきせきかく）を作り、鏡や鉄製品を副葬する、という古墳の主要要素を取り入れながら、前方後円墳ではないところが特徴です。弥生時代に有力な地域だった吉備や筑紫（ちくし：北部九州）でも、古墳時代になると、大型古墳は多くが前方後円墳（地域によっては前方後方墳）になるにもかかわらず、弥生時代の四角が基調の形を作り続けていたのはなぜでしょう。これは日本の考古学上でも論争になっている問題で、簡単に結論は出せませんが、出雲は相対的にヤマトの王権からの自立性が高かったからだ、

という考えが有力です。前方後円墳連合体に属しながらも、独自のネットワーク、特に大陸や北部九州との交流や流通を持っていたために、地域としての伝統的な形を維持して行けたのではないでしょうか。

松江の古い方墳　松江周辺では、四隅突出墓の時期と同様に、中小の古墳が各地に築かれました。墳丘を石で飾る葺石も見られません。形は荒島古墳群と同じ方墳です。竹矢町社日1号墳、東出雲町寺床（てらどこ）１号墳、古城山古墳、八雲町小屋谷３号墳、などで、いずれも大型ではないにしろ中国の鏡を副葬しています。出雲東部の中で、荒島地域には及びませんが、それぞれの地域首長が輸入鏡や小型鏡を手に入れ、弥生時代には副葬されなかった鏡や鉄製の武器・工具などを副葬しています。松江の小地域首長も力を蓄えていき、それぞれが強い結びつきを果たしていく準備段階だったと考えられます。

古墳時代で最初の大きな転換点は、次の時期、前期中ごろ（４世紀）に訪れます。

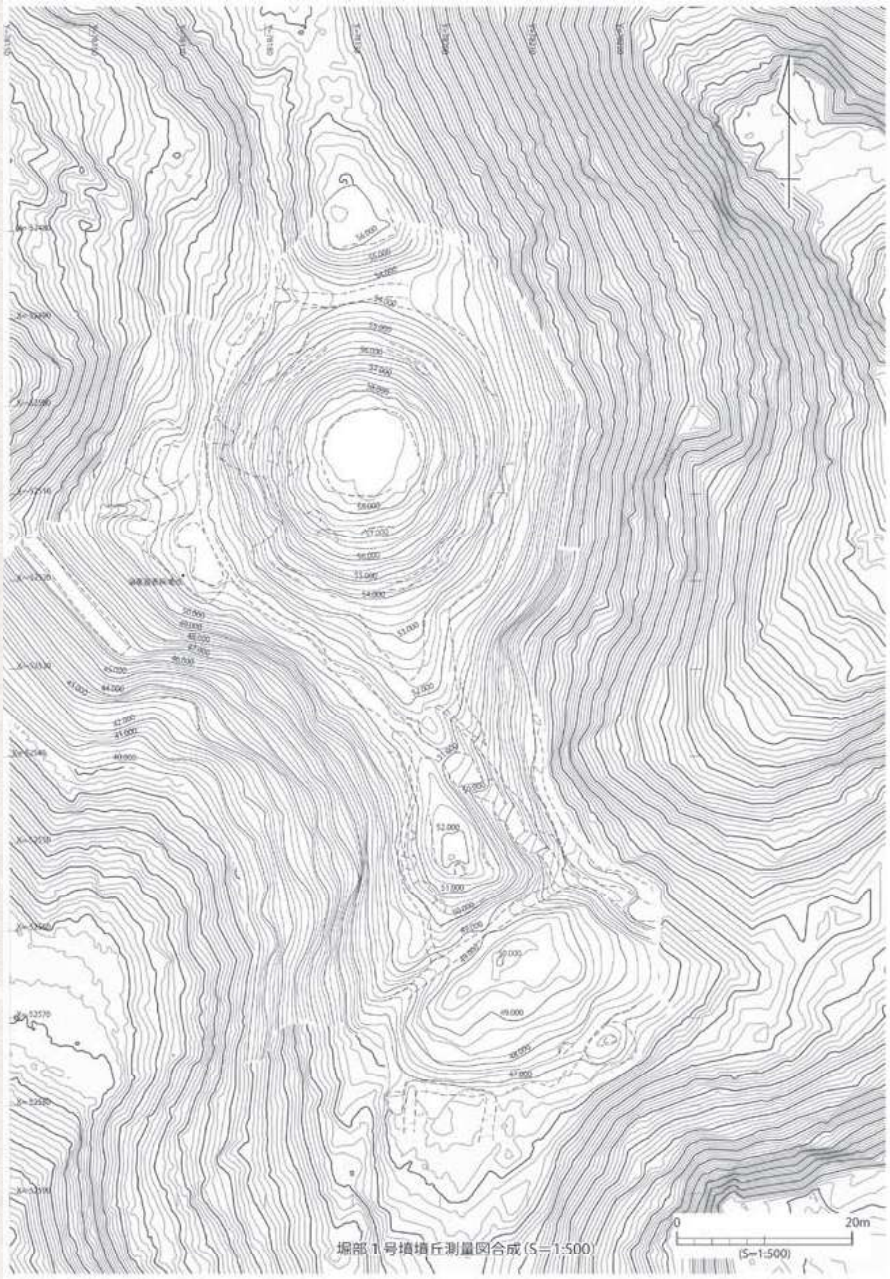
社日古墳出土の副葬品類
（島根県埋蔵文化財調査センター提供）

2．松江が水上交通の要（かなめ）をおさえる

⑴ 前方後円墳（前方後方墳）築造の始まり

日本海と宍道湖の通り道　近年の調査で、松江で前期の前方後円墳や前方後方墳が明らかになってきました。鹿島町北講武の堀部１号墳（前方後円墳）と名分丸山１号墳（前方後方墳）、竹矢町の上竹矢７号墳（前方後円墳）です。鹿島町の二つの古墳は、日本海の入り口である古浦の港や、宍道湖に繋がる低地帯（後の佐陀川）を見下ろす場所に当たります。安来で伝統的に造られてきた方墳ではありませんので、新たにヤマト王権と結びつきを持った地域の有力者が築造したと考えられます。

堀部１号墳は、最近の調査により全長68mの前方後円墳で、埴輪や葺石はないことがわかりました。そこも安来市荒島の方墳群と異なるところです。繰り返しますが、鹿島町古浦と宍道湖岸を結ぶ低地帯の分水界を見下ろす位置にあります。この分水界は、日本海に抜ける川と宍道湖に流れる川が同じ低地にあり、陸上を曳いて舟を水域



鹿島町堀部１号墳 墳丘測量図
（島根県古代文化センター提供）

と水域の間を越させる「舟越」だった可能性もあります。中海を通過せずに日本海から宍道湖に入る格好のルートで、交通、流通で押さえるべき場所だったと考えられます。

また名分丸山１号墳は全長40mの前方後方墳で、やはり埴輪や葺石はありません。前方部の形が、バチ形に開く古い特徴を持ちます。この古墳から見渡せる古浦海岸は、近畿地方と九州や大陸を結ぶ日本海ルート上で重要な寄港地だった可能性もあります。

鹿島町堀部1号墳 前方部から後円部

どちらが古いかはわかりませんが、４世紀前後までさかのぼる可能性があります。ヤマト王権は、弥生時代以来の大きな勢力の荒島と緩い関係を保ちながら、北からの新たなルートで松江周辺の有力豪族と手を結ぼうとしたのでしょう。鹿島町のこれらの古墳がある一帯は、実は弥生時代後期から近畿地方周辺や九州・大陸とのかかわりが深い地域でした。大きな墳墓は作っていませんが、その関係が強化されたのかもしれません。

意宇川周辺の最古の前方後円墳　また竹矢町の上竹矢７号墳が同様の時期の古墳の可能性があります。この古墳も全長66mの前方後円墳で、堀部１号墳と古墳の形が似ています。同様に埴輪や葺石を持ちません。小型方墳を造っていた松江市南部の意宇川周辺地域も、新たなヤマト王権との強い関係を結んだのかもしれません。

出雲の中央部を横断して造られた古い前方後円（方）墳は、弥生時代後期の出雲の力関係にくさびを打ち込み、松江周辺地域の豪族とヤマトの豪族が強い関係性を築こうとしたものとも推測できます。

ヤマトの埴輪を持つ前方後円墳　やがて４世紀の半ばころ（前期後半）に、意宇平野を望む丘の上に廻田（さこた）１号墳が築かれます。松江市街の南郊、茶臼山

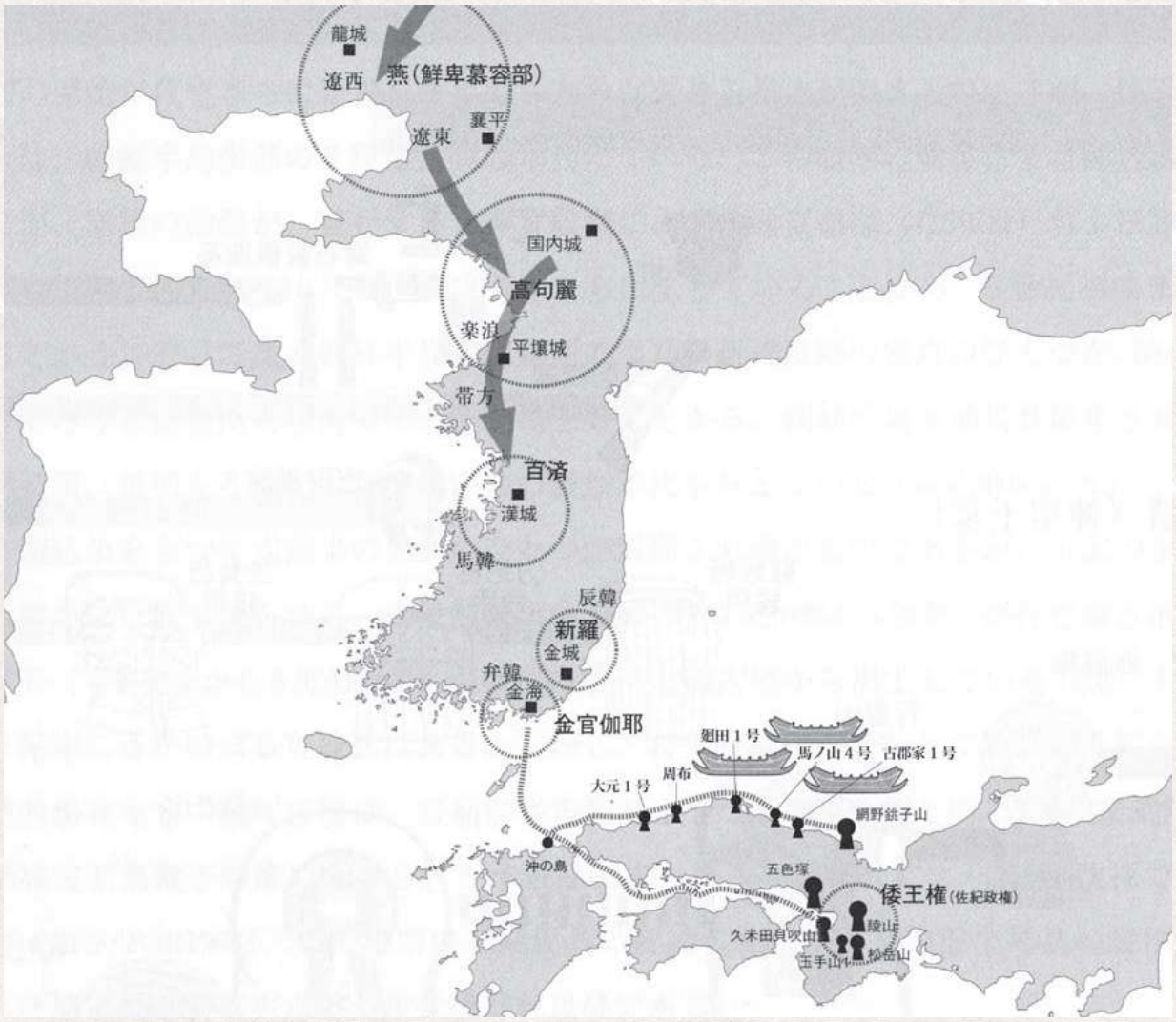
の隣の山上に築かれたこの古墳は、全長が58mで隣接する上竹矢７号墳と同様に、この地域の中では大型です。特徴は大和北部型と呼ばれる近畿地方の古墳で使われている円筒埴輪を備えていることです。奈良盆地でも、王陵級の古墳が盆地の東南部から北部の古墳群に移る時期で、特徴的な埴輪が造られました。この種の円筒埴輪が松江にも導入されたことは、一層ヤマトとの関係性が強まったことを示します。

廻田１号墳は後に出雲国府がおかれる意宇平野を南に見下ろし、北側には大橋川が流れている眺望に優れたところに造られています。どうして松江市南郊に前方後円墳が現れるのでしょうか。

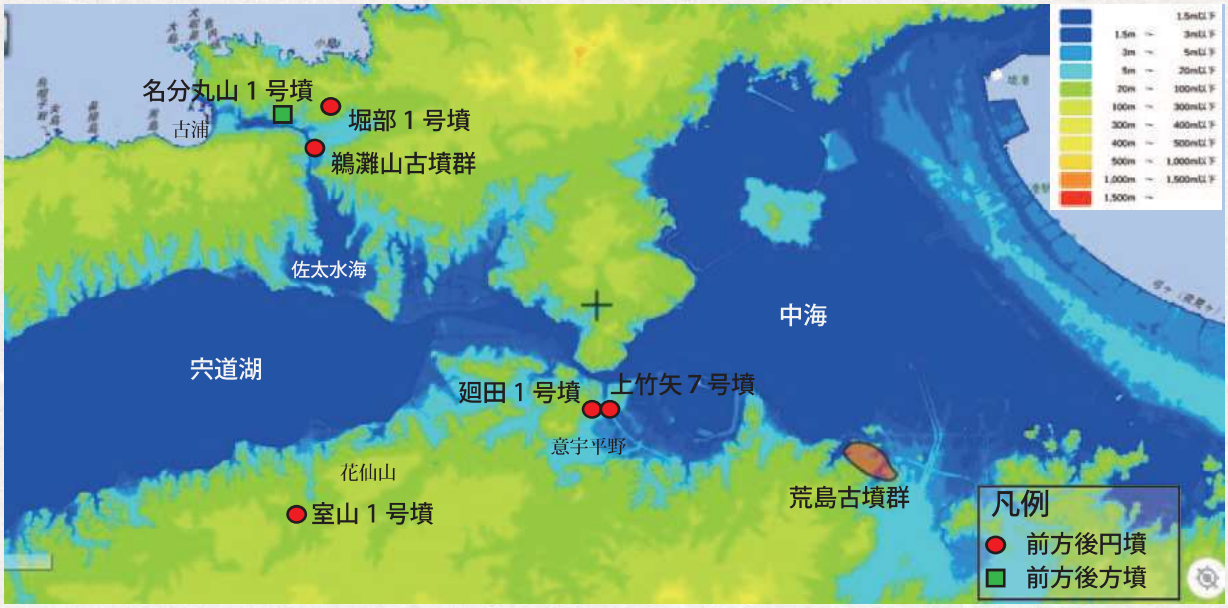
廻田１号墳測量図

一つはヤマト王権側の事情として、この時期に西へ向かう海路として日本海側が重要になったことと関係するでしょう。丹後半島に大型前方後円墳が出現し、そこから西に向かって鳥取県、島根県と前方後円墳が造られるとともに近畿地方の埴輪が現れます。前期前半にメインルートだった瀬戸内ルートは、地域ごとに陸や島に囲まれ、少しでも地域間関係に不確定要素が生じると、不安定な海路となります。その回避のため、日本海沿岸地域とのよしみを強くする必要があったと考えられます。

いっぽう出雲側の事情としては、内水海の人、物資、文化の受け入れ地として、中海と宍道湖をつなぐ間の狭い水道を管理する重要性が増したのではないでしょうか。次の図を見ると明らかなように、大橋川の東、中海の西端は川幅が狭くなり、水深も浅くなっています。ここで航行する舟を一度止めることで、出雲の東西の流通を一手に握ることができます。中世に馬潟で関銭を取っていたことと意味が重なります。意宇（おう）地域（現在の大庭町、大草町、竹矢町周辺）は中海・宍道湖の流通幹線に隣接する地の利でもって、東部出雲の中核的な位置に立ち、ヤマト王権との親密性を深めたと推測できます。その後、松江周辺が出雲の中心地となっていく起点がここにあります。

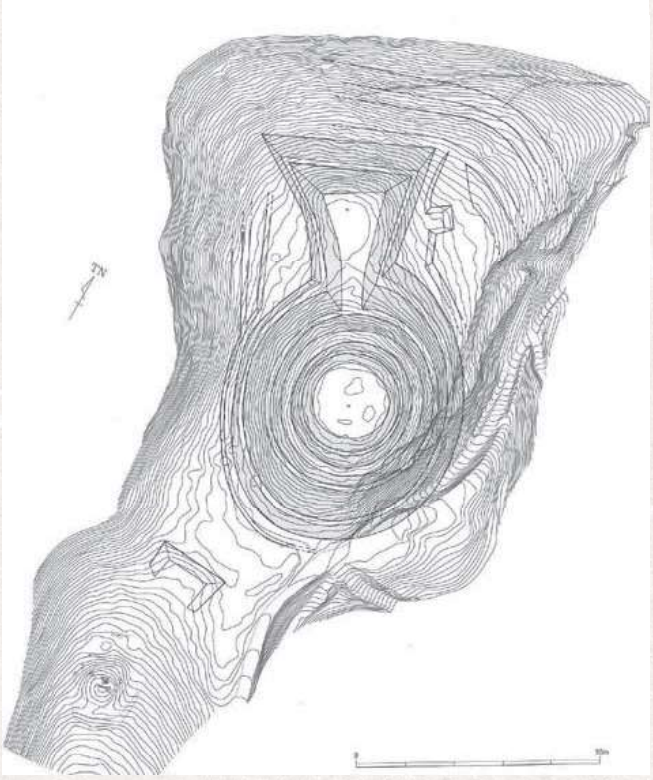


4世紀後半の東アジアとヤマト王権（日本海側の水運が重要となる）
（『松江市史　通史編１　自然環境・原始古代』より引用）



古墳時代前期の前方後円（方）墳の分布図
（前期前半の大型古墳が集中する荒島古墳群とは墳形が異なります。）

玉湯の前方後円墳　ところで近年、廻田１号墳と同じころに築かれたと考えられる前方後円墳が分かりました。玉湯町室山の室山１号墳で、全長70～80mの大型墳です。宍道湖を見下ろす丘陵上に築かれました。廻田１号墳と同様な埴輪も見つかっています。



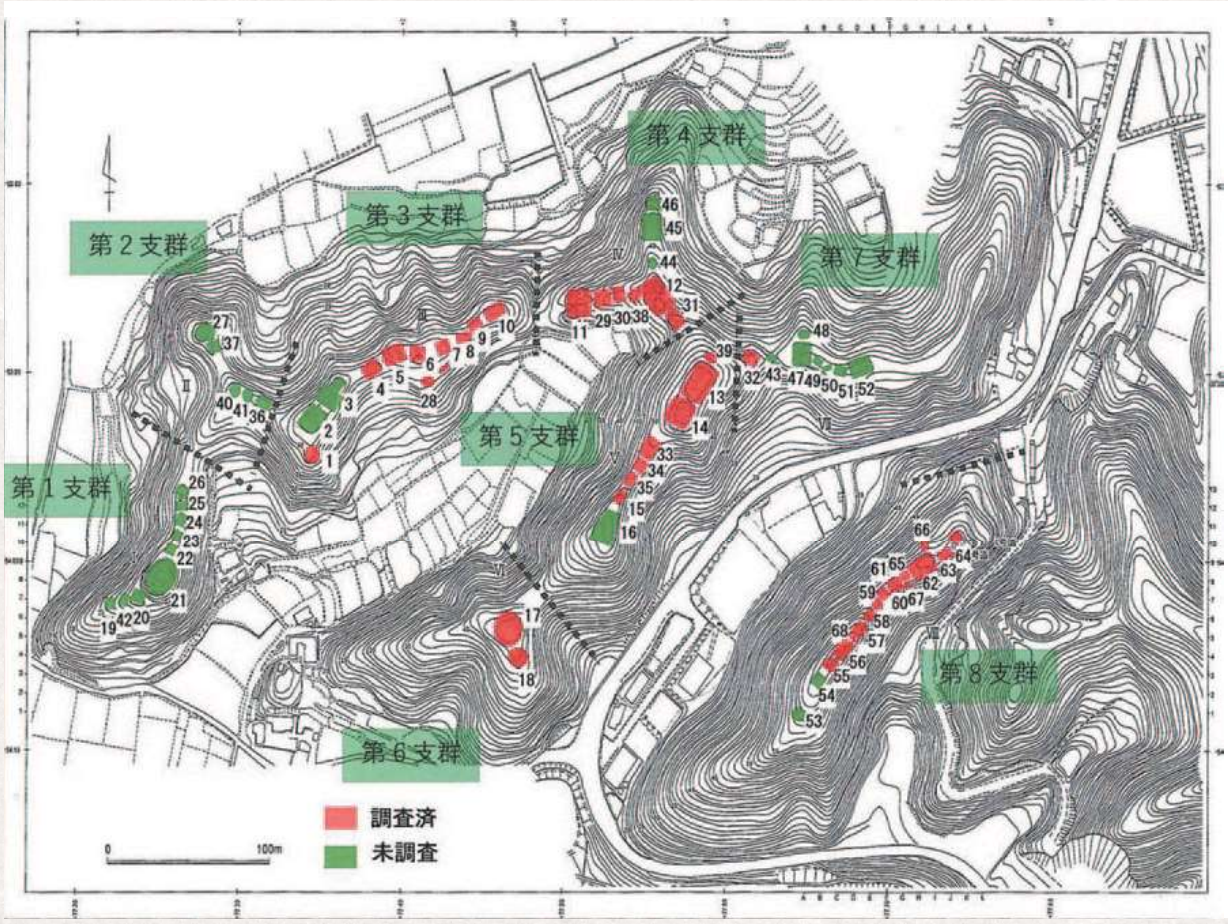
玉湯町室山1号墳 墳丘測量図
（内田 - 曳野 - 松本2024より引用）

想像を膨らませると、玉湯町周辺には古墳時代の玉作で使う青メノウや赤メノウを採取できる花仙山があり、その麓では古墳時代前期後半には玉作りがおこなわれるようになっていました。古墳の副葬品の重要な要素であるメノウの勾玉や管玉は、ヤマト王権にとって重要な物品だったはずです。玉やメノウ製品を作るための原材料を近畿地方に運ぶためには、堀部１号墳などが造られ、その後も鵜灘山古墳群や奥才古墳群などが造られた鹿島町を北上するルートが最適だったと考えると理解がしやすいと思います。

玉作とメノウ　花仙山で青メノウ（碧玉）や赤メノウを採取し、玉を製作する工人たちを束ねて統括する豪族があらわれ、メノウの原石や玉を入手したい近畿地方と深い関係を持った結果、前期の大型の前方後円墳が築造されたと考えてみてはどうでしょう。玉の原材料は、ヤマトが出雲との関係を強化したい背景の一つだったと考えてみるのです。出雲中央の日本海ー宍道湖ルートの発展も、ヤマト王権と松江周辺の豪族たちの様々な思惑があってのことと想像すると、面白い話になります。

古墳時代前期の
勾玉未成品
（史跡出雲玉作跡出土）

海民集団の古墳群　前方後円墳ではありませんが、中小の古墳が密集する古墳群として、鹿島町名分の奥才古墳群があります。古墳時代の初めころから10m前



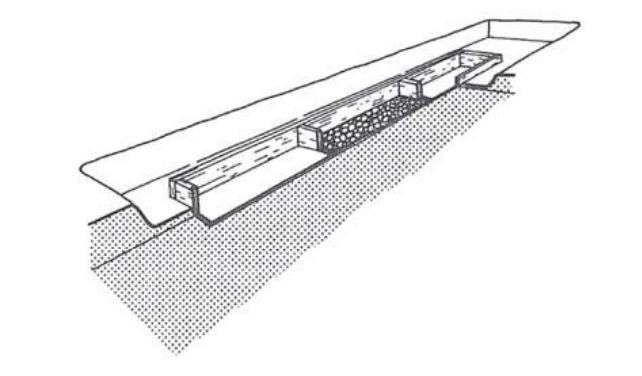
奥才古墳群全体分布図

後の小規模な古墳が作られていますが、前期半ばから後半ごろに20～30ｍと中型の円墳と方墳が作られます。並んで見つかった奥才13号墳（方墳）、14号墳（円墳）と呼ばれる２つの古墳は、ともに板石をきれいに加工して組み合わせた箱式石棺を作り、底に小さな丸い石を敷いた埋葬施設を置いています。特に13号墳からは銅鏡２面をはじめ、鉄製の大刀

奥才古墳群航空写真（海がほど近い）

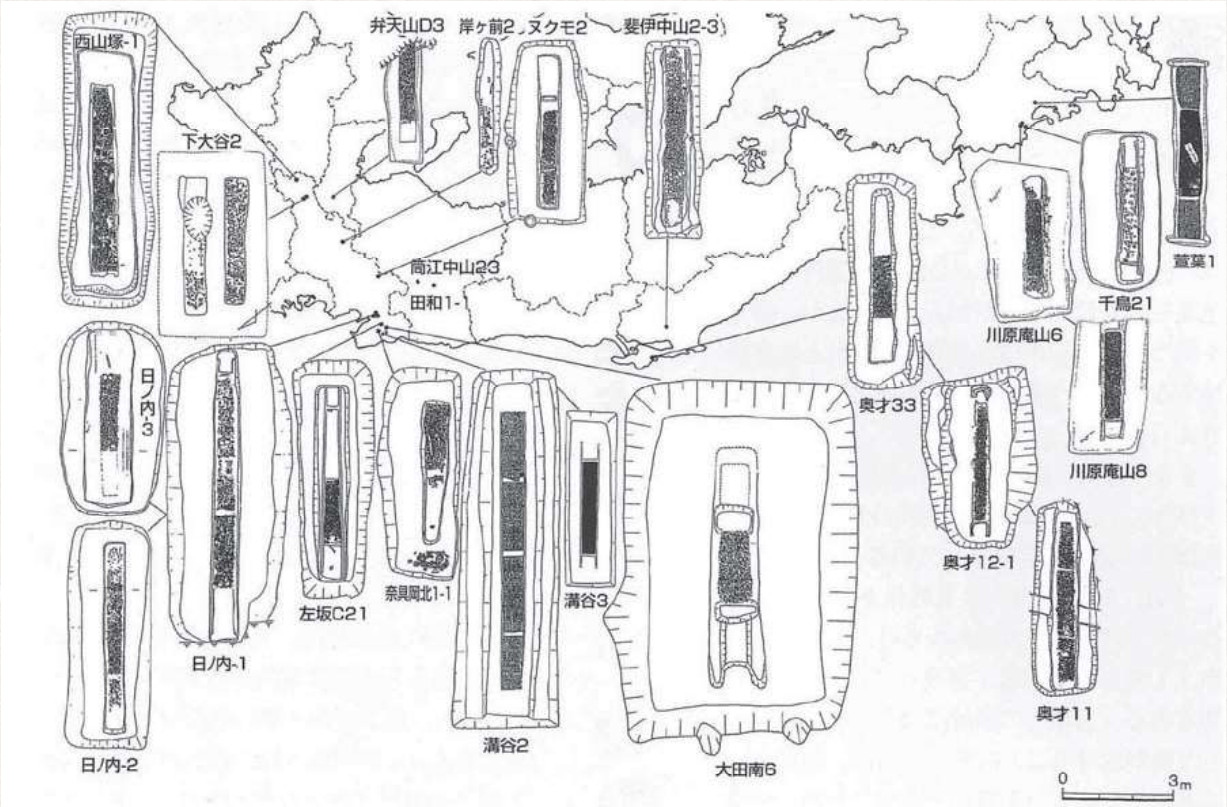
や剣などの武器・工具類、青メノウ製の紡錘車形石製品など、大型古墳に匹敵する副葬品が出ています。

近くに古墳時代前期の首長の古墳（大型前方後円墳）が存在するにもかかわらず、このような古墳群が造られた理由は何でしょう。特定の海岸の円礫を棺の底に敷くのは海との関係を示唆します。また壺を子供を葬る墓の中に詰めたりする習俗は、日本海沿岸部に共通する特徴です。日本海



奥才型木棺

奥才古墳群出土の主要な副葬品



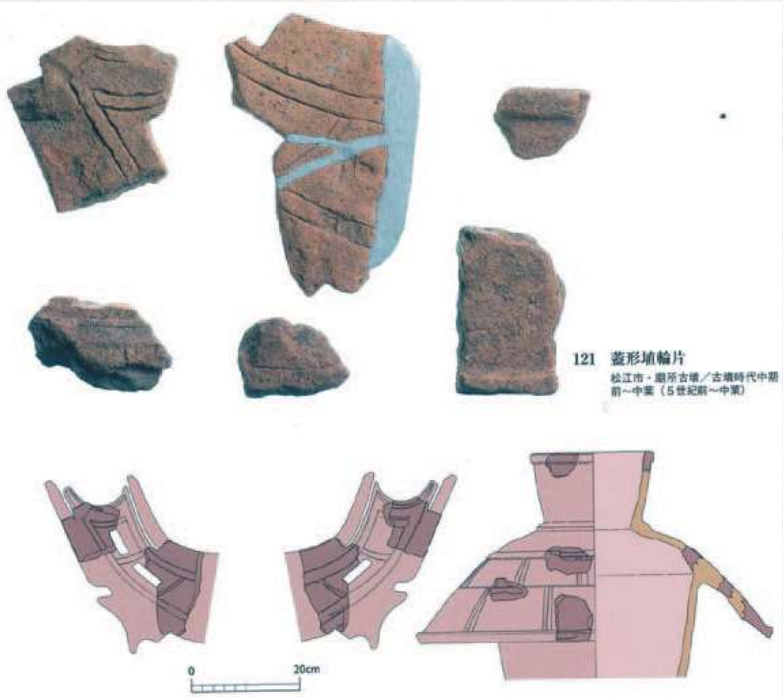
奥才型木棺の分布図
（出雲が分布の中央にあり、北部九州から近畿地方まで広がります。地図は南が上です。）

と宍道湖周辺低地をつなぐ、鹿島地域の首長の権威の基盤には、海上交通を直接担う海の民がいたと考えるのが自然です。日本海を舞台に漁労や海上交通を担った海民の古墳群と考えられるでしょう。また、長い木棺の底に円礫を敷き、その中を仕切る構造をもった棺は「奥才型木棺」と呼ばれ、日本海沿岸を中心に分布しています。特に鹿島を中心とした出雲、丹波・丹後（兵庫県・京都府の北部地方）、北部九州に分布の中心があり、こうした地域を核として日本海を通じた深い関係ができていたものと推測されます。

⑵ 出雲の水上交通を掌握した松江の豪族がヤマト王権の重臣となる

大型方墳の築造　古墳時代中期の５世紀になると、宍道湖・中海周辺に40m～60m以上の大型方墳が築かれます。ヤマトを中心とする地域連合の象徴の前方後円墳を築き始めた東部出雲で、なぜ有力首長の古墳がまた方墳になるのでしょうか。

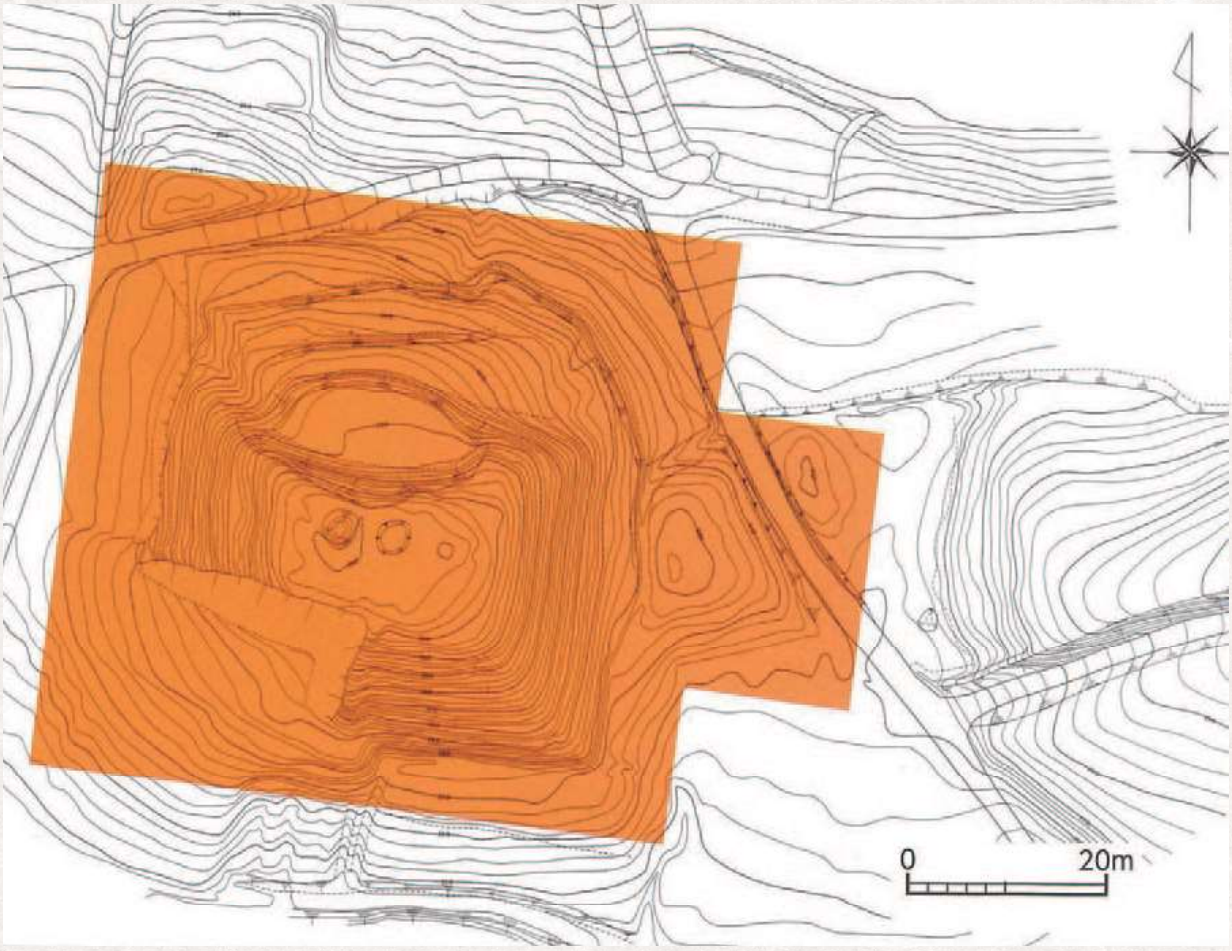
廟所古墳　まずは代表的な５世紀の大型方墳を見ていきましょう。５世紀前半ごろ、大橋川を望む西尾町の丘の上に廟所古墳が築かれます。一辺60ｍを超え、造り出しを含むと全長80mにもなる巨大な方墳です。墳丘斜面を石で飾る葺石（ふきいし）が施され、何よりも円筒埴輪と形象埴輪が出ているのです。円筒埴輪は５世紀の大王墓が集中する百舌鳥・古市古墳群の埴輪と同様の仕上げ方が確認されています。また形象埴輪は蓋形（きぬがさ）の小片しか見つかっていませんが、大型で大王墓系の古墳で使われる優れたものです。



廟所古墳出土のきぬがさ形埴輪とその復元図

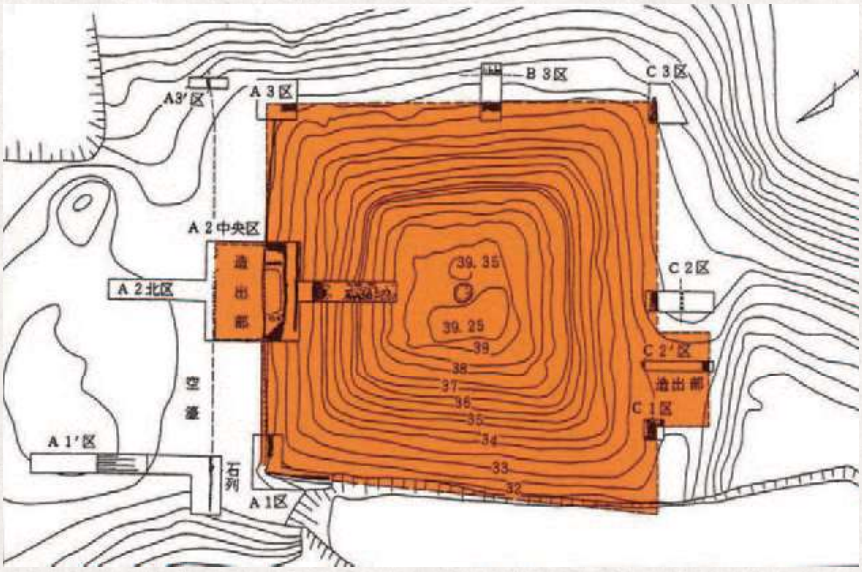
これまで出雲地方で造られて来た古墳の中でも、最大級のボリュームの古墳が、大きな平野のない朝酌地区の、大橋川北岸に現れることは大きな画期です。

古墳時代前期（３世紀中葉～４世紀中葉）には、方墳、前方後円墳と有力古墳が変化し、埴輪は古墳の一部に置かれたり棺に使われていましたが、中期には斜面に石を貼って墳丘に埴輪がめぐる方墳となったわけです。



廟所古墳墳丘測量図

石屋古墳　大橋川南岸には東津田町の矢田の渡しを見下ろす丘に、5世紀中ごろの一辺45mの石屋古墳（史跡）が造られています。廟所古墳同様に石で飾られていて、２か所に造り出しが見られ、墳丘やその裾には円筒



石屋古墳墳丘測量図

埴輪がめぐらされます。造り出しではマツリが行われたと考えられ、多くの円筒埴輪、形象埴輪が出土しています。

形象埴輪は、武人、貴人、力士などの人物、馬などの動物、大型の椅子に座る豪族、楯や靫（ゆぎ・弓矢を入れる背負い箱）などの武器、家、蓋（きぬがさ）などの威儀具と多種多様です。しかもそれらの造形は、大王墓出土のものと遜色ない素晴らしいもので、人物埴輪としては全国でも最古級と考えられています。中でも力士の埴輪の太い尻からくびれた腰にかけてのリアルさは、全国の力士埴輪の中でも出色です。近畿地方中央部の同時期の埴輪にも負けず劣らずの出来栄えで、大王墓を飾る埴輪を作った埴輪工人が、松江に派遣されて製作したものと考えられています。ほかの地方では見られない、古くて見事な埴輪と言えるでしょう。

石屋古墳出土の椅子（上に首長が座る）、
馬形、力士形埴輪

石屋古墳墳丘

5世紀の大型方墳の分布　以下の図を見ると、古墳時代中期の主要古墳は松江市内に集中していることが分かります。特に大型方墳の分布の濃さは明瞭で、松江

出雲地方の主要な中期古墳（５世紀頃）の分布図
（松江市内の方系古墳の多さが目立ちます。）

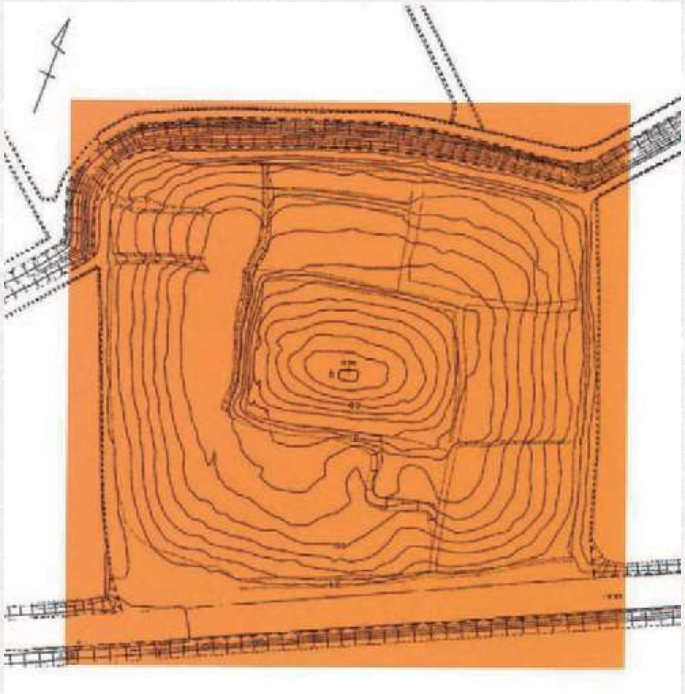
市内でも大きく３つの分布域があるのが分かります。一つは廟所古墳がある大橋川北岸の朝酌地区、もう一つは石屋古墳がある大橋川南岸の竹矢地区、そして宍道湖北岸の古曽志町周辺です。中型古墳は、松江市街の北側にも分布しています。

この古墳分布状況は、明らかに中海・宍道湖と大橋川を意識したものと言えるでしょう。前期に鹿島町周辺で古墳を作っていた集団も、宍道湖沿岸に南下して古墳を築いています。古墳は権力や地位を見せるものですから、５世紀には内海とそれをつなぐ大橋川からの見えが、とても重要だったことが分かります。特に大橋川両岸の密度は圧倒的です。前にもお話したように、中海と宍道湖を東西に船で通行しようとすると、朝酌地区と竹矢地区の間に狭い水道を通らざるを得ません。ここを見張るように古墳が林立する意味は、想像をたくましくすれば、舟に両岸地域の力を見せつけるようにも思えます。ただでは通さないぞ、といわんばかりに。

内海をめぐる大型方墳　主要な大型方墳を紹介しておきましょう。古曽志町の国史跡**丹花庵**（たんげあん）**古墳**は一辺50m以上の方墳で、５世紀前半ごろの築造と考えられます。石で飾り、埴輪を並べるのは同じ特徴です。この古墳は埋葬

施設が分かっている珍しい例で、大王墓や大規模前方後円墳にみられる長持形石棺です。すでに内部は古くに乱されていますが、皮で綴じた古いよろいを副葬しています。

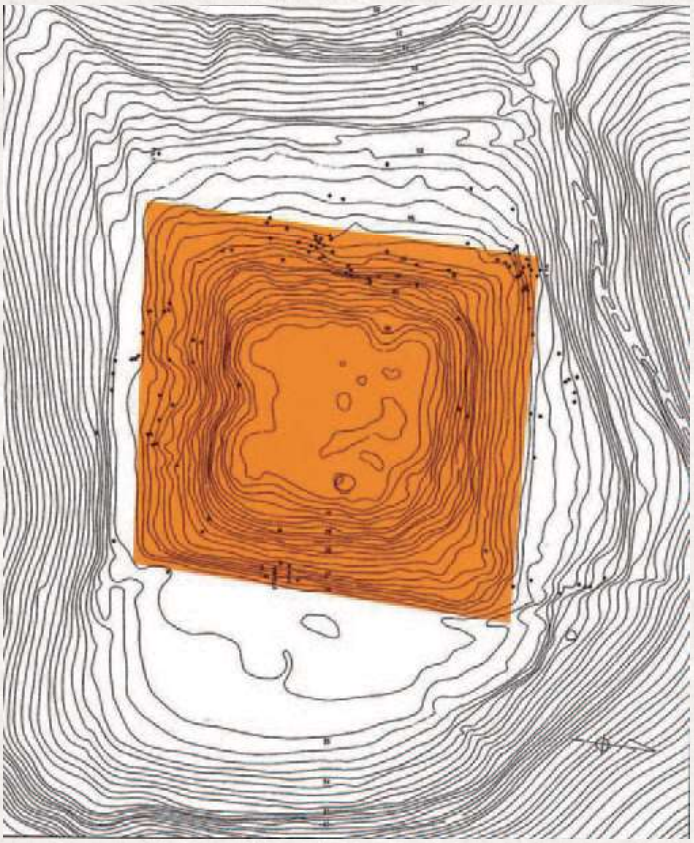
丹花庵古墳石棺蓋



丹花庵古墳墳丘測量図

朝酌地域には廟所古墳の近くに一辺40mの**観音山１号墳**があります。この古墳を掘った時の古い絵図によれば、長持形石棺が埋まっている可能性があります。

観音山１号墳墳丘
（島根県古代文化センター提供）

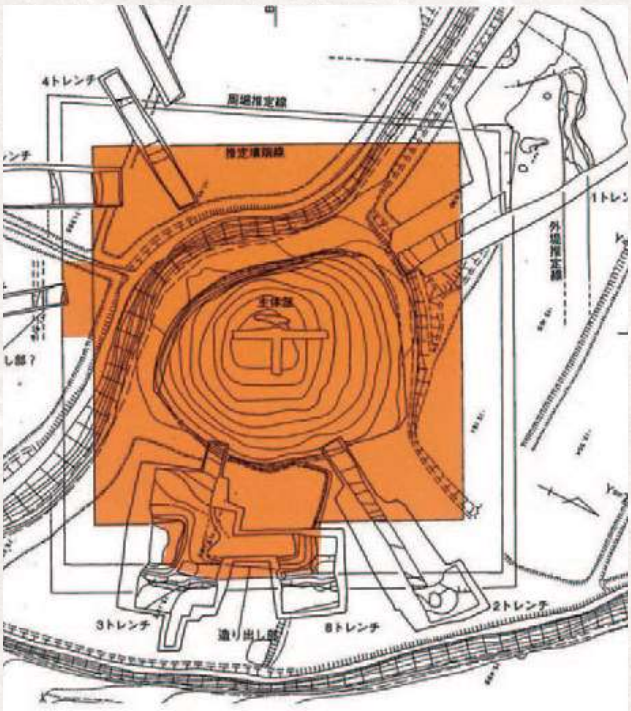


観音山１号墳墳丘測量図

竹矢町には**荒神畑古墳**と**井の奥１号墳**が大型方墳として知られますが、埴輪と葺石がある以外の詳細は知られていません。ただ埴輪の特徴から、５世紀でも古い時期と推測されています。内部は未発掘で不明ですがともに葺石（ふきいし）と埴輪があり、他の方墳と同様です。また近年、平浜八幡宮の近くに、**八幡鹿島山古墳**が発見され、一辺40ｍ前後の５世紀前半ごろの古墳であることが分かりました。近畿地方と同様の特徴を持つ円筒埴輪が立てられ、周溝があり、その外側の高まり（外堤）にも埴輪が立てられていたことが分かっています。廟所古墳と同じころの古墳と推測されます。

八幡鹿島山古墳（上は東から見た方墳の墳丘、
下は墳丘の周りの溝とその両側斜面に施された葺石。）

法吉町の**塚山古墳**は一辺35m程度の方墳で、造り出しがあります。そこから円筒埴輪、形象埴輪と須恵器が出ています。特に力士埴輪は小型ながら古い特徴を持っていて注目されています。発掘調査で小さな円礫を棺の底に敷いた埋葬施設が見つかっており、よろいや多くの鉄製武器類、中型の鏡などが出てきています。



塚山古墳墳丘測量図

塚山古墳出土の副葬品
（古代出雲歴史博物館提供）

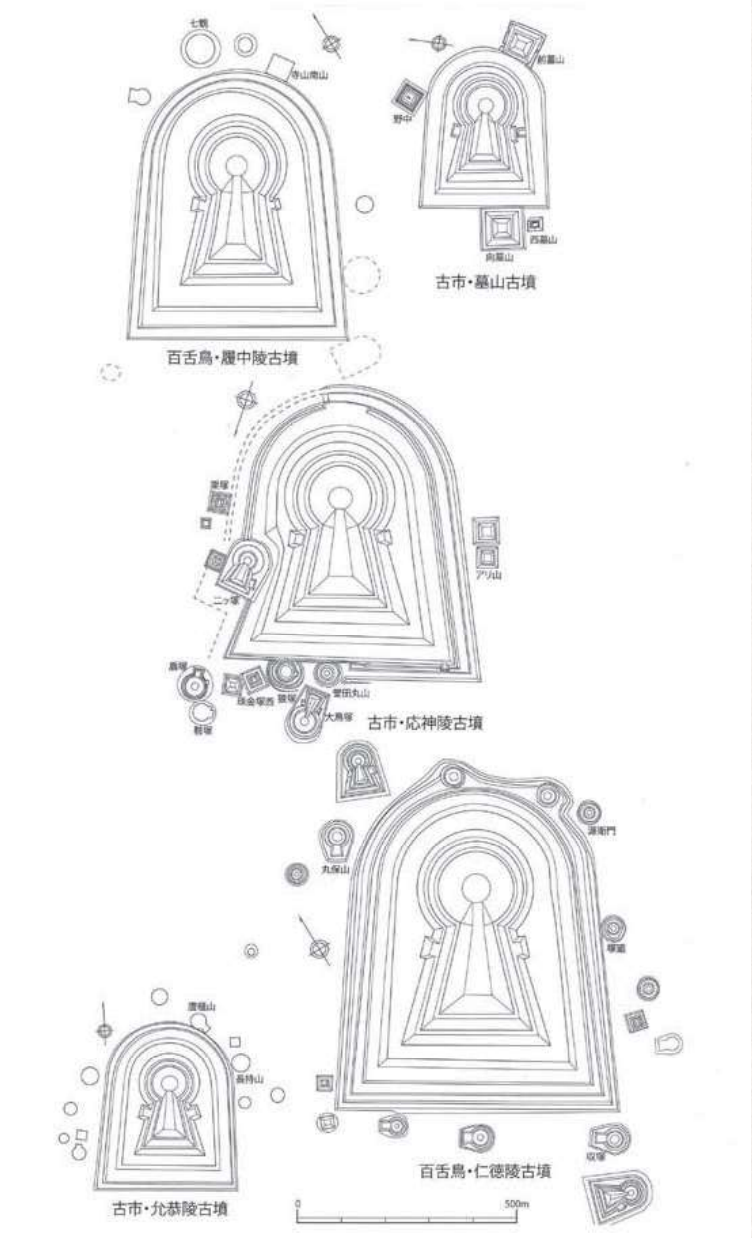
塚山古墳の力士形埴輪

大橋川の南北勢力が結束　これまで見てきた古墳群の在り方から考えてみると、大橋川や中海宍道湖沿いに大王墓形埴輪を共有する大方墳の築造が浮き上がります。特に北部勢力は古墳の築造場所を大橋川沿岸や宍道湖沿岸に意識的に移しています。主要ルート、内海の東西交通路を管轄するためには、南北で大橋川を挟み込むことが重要なのです。おそらく５世紀ころに、南の豪族（後の出雲国造（くにのみやつこ）となる意宇（おう）の勢力）と北の豪族（佐太国（さだのくに）、闇見国（くらみのくに）連合体、のちの島根郡郡司大領勢力）が、ひとつの勢力として合体し、のちの出雲の原型を形成したのでしょう。

5世紀の方墳に共通する特徴　いろいろな古墳を紹介してきましたが、方墳を作ること以外にも共通する特徴があります。墳丘は分かっているものは２段に造られて、その上の段の墳丘が背の高いものになっています。また前期の古墳にはなかった葺石があり、埴輪がめぐらされています。円筒埴輪は百舌鳥（もず）・古市古墳など大王墓系の埴輪と同じ作られ方をしています。また、大王墓級の古墳祭祀に使われ始めた人物埴輪などの形象埴輪をいち早く取り入れています。その埴輪の造形は、近畿地方中央部のそれと勝るとも劣らないものであることも大きな特徴です。大王やその大王級の豪族から、優秀な工人集団が派遣されたとも考えられます。

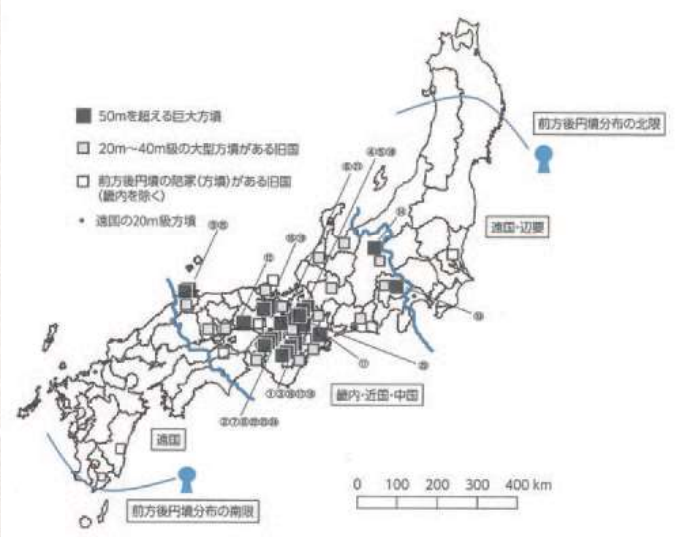
大王墓の陪冢と松江の方墳

ここで近畿地方中央部の大王墓やそれに匹敵する古墳がどのようなありかたなのか見てみましょう。最大400mを超えるような前方後円墳が５世紀前半から半ばくらいの間に造られ、それらは堀をめぐらせています。そして堀に沿って中型・小型の古墳が寄り添っています。陪冢（ばいちょう）と呼ばれるこれらの古墳には、倭（わ）国の大王の近親者や重臣が葬られたと考えられています。そして五世紀前半の大王墓級の前方後円墳の周りには、陪冢として方墳が造られる傾向があるのです。しかも、一段目が低く、上段の墳丘が高い、という特徴は出雲の中期方墳とよく似ています。



百舌鳥・古市古墳群の大前方後円墳と陪冢

右図は古墳時代中期の50m以上の大型方墳の全国分布を示しています。西日本では近畿地方以外に大型方墳を作るのは出雲だけです。それはほとんど松江市に集中しているのです。墳丘の特徴、近畿地方の大王墓系の埴輪などから見ると、松江の大型方墳は、大王墓の陪冢と同じ性格付けをされていたと考える説が主流になりつつあります。つまり、松江の有力地域首長は、大王の重臣と同様の扱いを受けていた可能性があるのです。出雲を代表する首長とヤマト王権の大王やその側近は、５世紀ころに強く手を結んだと推測されます。なぜか、それは明確な答えはわからない、としか言えません。あえて想像をたくましくするならば、右図をもう一度見てみると、ヤマトにとって出雲は北西の境界にあたります。そして当時交渉が盛んとなった大陸と海を介して直結できる場所です。なかでも出雲東部の松江周辺は、地域と地域の結び付きが他の地方よりも早く、のちの「出雲国」の原型を形成していたと考えられます。松江周辺の豪族たちが結束して、倭国の北西境界を警戒するヤマトと、強い関係性をもったのではないでしょうか。



５世紀の大型方墳全国分布図

大橋川南岸に並ぶ大型古墳群
（島根県古代文化センター提供）

ヤマトからの派遣が続く埴輪工人　石屋古墳には、当時の倭国を代表する人物や馬、家などの形象埴輪が出てきたことは前に述べたとおりです。おそらくは最先端技術を身に付けた工人集団がヤマトから派遣されたものと推測されます。技術供与はそれで終わりではありませんでした。

矢田町平所埴輪窯跡から出てきた形象埴輪は、見返りの鹿をはじめ、造形的に比類ないものとして、国の重要文化財に指定されています。ほかにも人物、家、馬、猪形などが焼かれており、その特徴はヤマトの同時代の埴輪と共通しています。石屋古墳の埴輪と全体形が比較できるのが馬形埴輪です。両者はよく似ていますが、石屋古墳の馬のほうがよりリアルな表現が見られます。埴輪の型式変遷の流れから見て、石屋古墳の埴輪が若干古く作られたもののようです。どうやら、石屋古墳の次の首長の葬送儀礼に使う埴輪も、ヤマトからの派遣工人集団が製作した可能性が高いのです。５世紀前半の廟所古墳にも大王墓系の形象埴輪がみられますので、少なくとも３代の松江の大豪族の葬送にかかわって、ヤマト王権が深く関与したらしいことが分かります。このような地域は、近畿地方以外には見られません。腹心の重臣だったと考えると、符合します。

平所窯跡出土見返りの鹿
（古代出雲歴史博物館提供）

平所窯跡出土の埴輪群
（古代出雲歴史博物館提供）

国史に記された出雲の豪族　日本最初の国の歴史書、『日本書紀』（720年完成）には、出雲とヤマトの5世紀の関係をうかがい知ることができる記載があります。一つは仁徳紀に「屯田司（みたのつかさ）　出雲臣（いづものおみ）が祖　淤宇宿禰（おうのすくね）」が登場します。屯田とは、大王家の直轄する田のことで、王家の財産基盤です。司は長官という意味です。出雲臣は、奈良時代に

編纂された『出雲国風土記』に出雲国造（くにのみやつこ）や多くの郡の郡司として記されている、出雲を代表する豪族で、淤宇宿禰がその祖先とされています。淤宇は意宇のことで、意宇郡の中心部、意宇川や意宇平野を本願地とする豪族の名前、宿禰は尊称です。つまり、出雲からヤマトに出仕した松江南部の豪族が、大王家の家産を管理する重職に就いていたことを示します。

その記事によると、仁徳天皇（即位前の太子）は、屯田の一部について所有権が不明確なものがあることを解決しようとし、淤宇宿禰に命じて、朝鮮半島にいる係争者（次の天皇位を争う皇子）と直接調整をするよう命じます。淤宇宿禰は淡路（あわじ）の海人（あま）に船を出させて朝鮮半島に向かい、件の地が仁徳のものと証言をしました。これが発端で、仁徳は皇位継承争いに勝ち、即位を果たした、というものです。経済基盤の所有や皇位継承にかかわる事案を、直接に呼び出して淤宇宿禰に解決を託したわけですから、信頼を寄せる直属の重臣だったことを記していると考えられます。

記載がそのまま事実とは言えませんが、出雲の大方墳が造られたころに、祖先を明示したうえでの名指し記事ですので、それに近い伝承が国史を作る段階まで伝えられていた可能性が高いといえます。５世紀の方墳が陪冢と同じであることと符合する注目すべき記事です。

⑶ 意宇川を南に流す

茶臼山の南には意宇川が土砂を流して形成した、意宇平野が広がります。今も豊かな水田や農地が広がるこの平野は、大型古墳を作ってきた豪族たちの米生産の中心地で、その権力を支える基盤でもありました。しかし、この意宇平野は簡単に水田として利用できたわけではないようです。

意宇川の流れと平野の形成　平野の地形全体を眺めてみると、上流（西側）から下流（東側）に向かって低くなるのは当然ですが、南北で見ると北側が低くなっています。この地形から察するに、もとは意宇川の本流は平野の北側を流れていたと思われます（現在は南側を流れる）。平野の中の細かな地形を見ると、最北部に古い河川の跡が見られます。

縄文時代以降、意宇川は上流の花コウ岩地帯を刻んで流れ、多くの土砂を八雲町の平野や意宇平野となる潟湖に流しました。意宇平野の西側には扇状地と呼ばれる、扇形に莫大な土砂が堆積した跡が見られます。扇状地ができると、川はその中で流路を変えながら暴れます。やがて意宇平野の東側では扇状地の中央付近

に、川の本流が刻まれたと考えられます。それが平野の中央にも認められる古い流路の跡につながったと推測できます。上流の土砂が流出するとともに、川の本流は扇状地も削って砂を流し、下流の平野を広げていきました。このような川のはたらきが、潟湖を埋めながら沖積平野を作っていったのです。

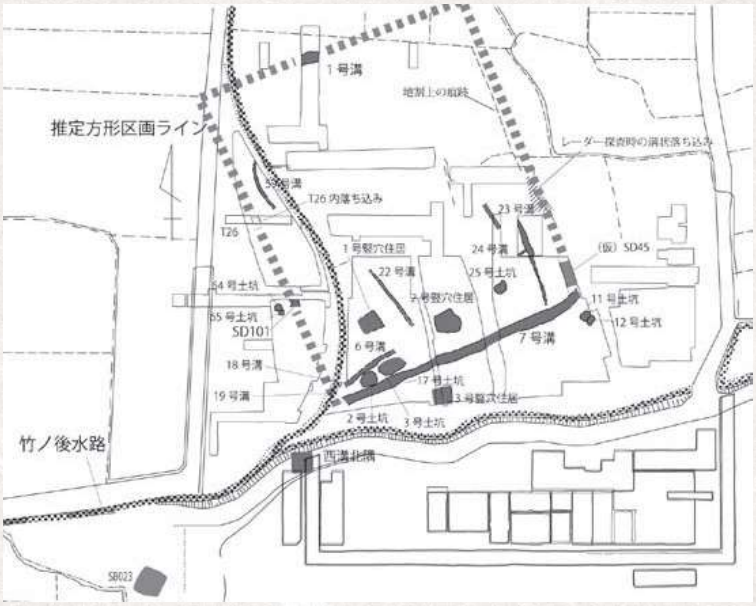
意宇川（大草町）

弥生時代の間には、意宇川は平野の中央を流れるようになり、川の北側を中心に水田開発が進んだと考えられます。水が豊富で水田に水を引くことが比較的やさしかったからでしょう。

一方川の南側は、北側に比べて土地の高さが高いので、水を引くのが難しかったのでしょう。弥生時代や古墳時代前期の遺跡はほとんど見られません。意宇平野の利用は限定的だったと推測できます。

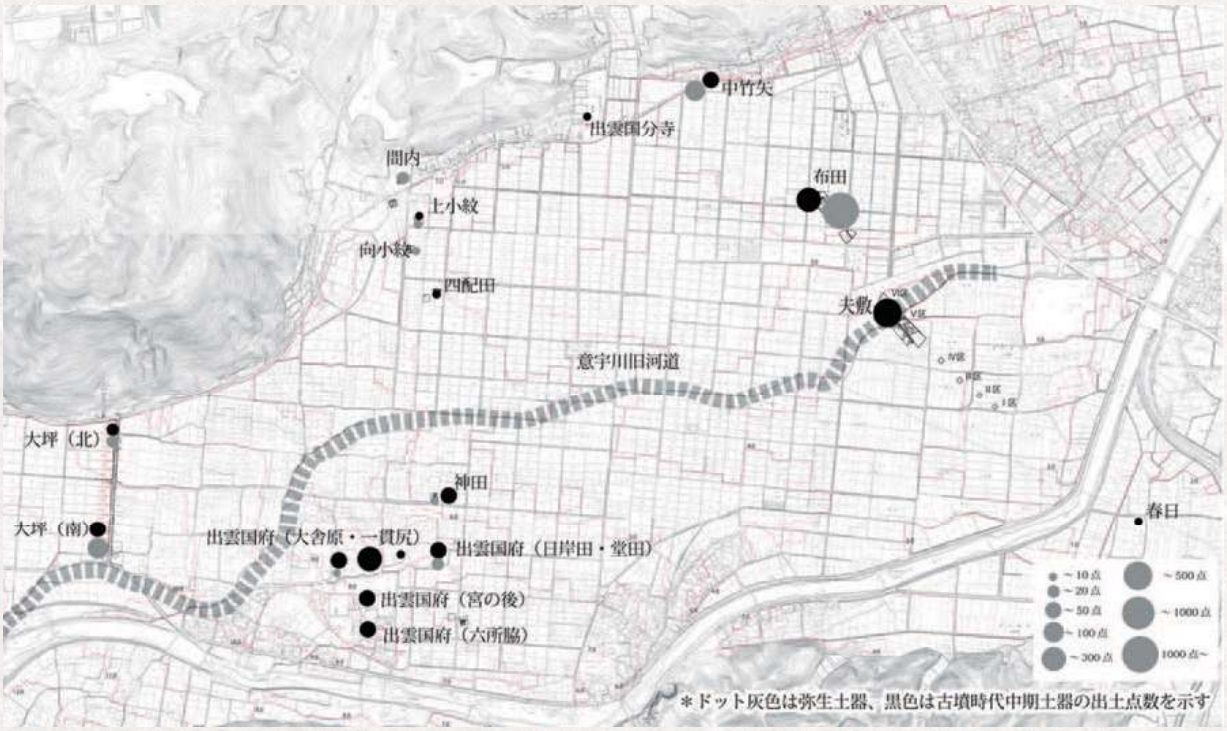
意宇川の流れを南に変えろ

古墳時代の中期、５世紀ころに意宇川の流れに変化が表れます。平野下流の中央付近で古い川の跡が発掘調査（夫敷遺跡）で明らかになり、４世紀ころまでは流れていた川が５世紀には埋まっていることが分かったのです。それと連動して、平野の南側に５世紀以降の遺跡が分布しています。そしてのちに出雲国府



出雲国府跡下層の豪族居館跡
（『松江市史 通史編１ 自然環境・原始古代』より引用）

がおかれる、現在の意宇川近くの少し高い平地に、豪族居館が築かれたのです（出雲国府下層遺跡）。一部の発掘で全体像はわかりませんが、周囲を長方形に溝で囲い、その中に豪族の居宅や竪穴住居が複数置かれていたようです。周りの溝は上流と下流への水路とつながり、水田稲作のための灌漑水路の基点となっていたと考えられています。



意宇川の旧流路と各時代の遺跡（古墳時代には中央の旧流路南に遺跡が増えます）
（『松江市史 通史編１』より引用）

このようなことから、５世紀ころに意宇平野の大開発があって水田面積は拡大し、それを指揮した豪族の居館が平野の南に設置されたことが推測されます。広い範囲に水路を敷きめぐらし、水を引いていくために、意宇川の本流は平野の南側、つまり高い位置に付け替えられたと考えられるのです。

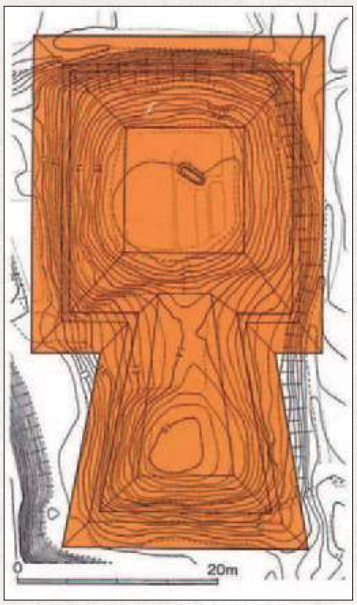
大開発を支える渡来人たち　こうした川違えと灌漑がセットになった開発は容易にできるものではありません。土砂を動かす土木工事と微妙な高低差を操る、高度な技術と動員力が必要だったことは想像に難くありません。実は５世紀は、さまざまな新しい技術が大陸から渡来してきたことが分かっています。出雲国府下層遺跡では、朝鮮半島で使われていた焼き物などがたくさん見つかっています。松江を束ねた豪族たちは、その住まいの一角に渡来人たちを囲い、その高度な技術の助けを受けて意宇平野を開発し、自らの力を高めていったのでしょう。

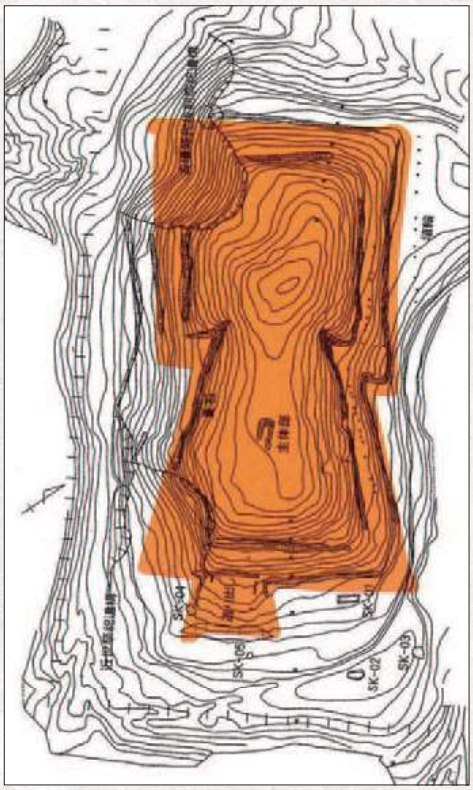
渡来人の招来には、当時大阪湾沿岸に伝応神陵古墳や伝仁徳陵古墳などを築いたヤマトの王権の助けもあったと思われます。松江で大型方墳を築いた豪族はヤマトの王族の重臣だった可能性は先にお話しした通りです。また『日本書紀』に記された「淤宇宿禰」の朝鮮半島での活躍も、5世紀のことで、意宇平野を開発した豪族の姿と重なります。ヤマトの王権と手を結び、水を制御して生産力を上げ、水上交通路を掌握して出雲での地位を上げたのです。

⑷ 松江の豪族が新たな古墳システムを創始

首長古墳が前方後方墳に　５世紀の後半、ちょうど平所窯で埴輪の生産が終わりを告げた直後ごろ、地域の有力豪族の古墳が前方後方墳に替わります。前方後方墳は、古墳時代の前期（３～４世紀）には、全国各地に前方後円墳と対照を成すように築造をされています。特に東海地方以東に多く、西日本でも要所要所で見られます。大きさは相対的に前方後円墳が大きく、数も多いので、有力な豪族でも出身集団や地位の違いを表した形と推測されています。松江でも鹿島町名分１号墳が前期の前方後方墳です。しかし５世紀になると、前方後方墳は激減し、５世紀後半にはほぼ造られなくなります。ところが、それに相前後して出雲、特に松江市を中心とする東部で前方後方墳が造られるようになるのです。

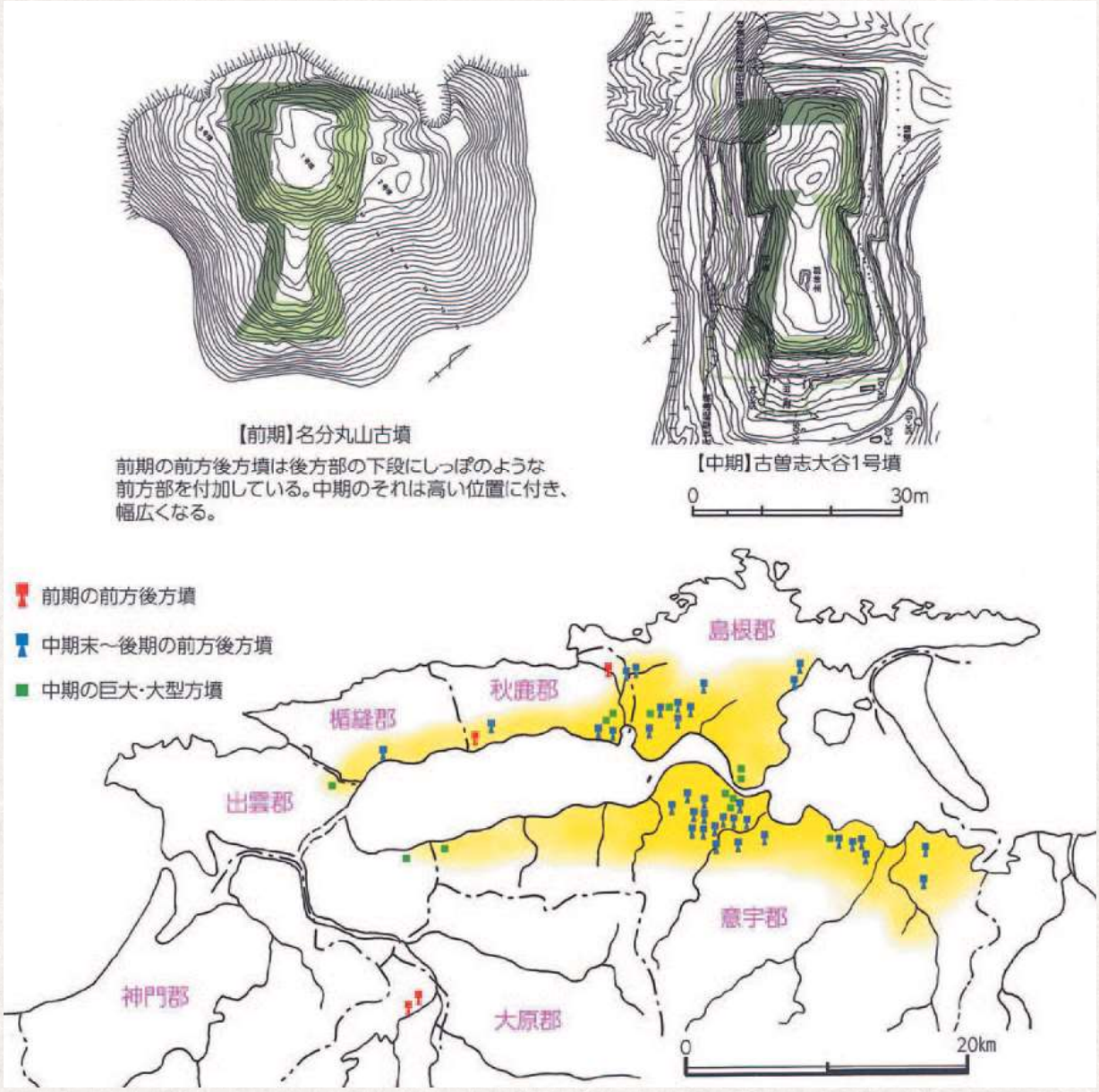
５世紀後半の有力古墳は、約50m前後で、築造された場所はそれまで大型方墳が造られた地域と重なります。そして、その立地も大橋川・宍道湖・中海を見下ろす位置です。内水面交通を強く意識した立地が続いていると考えられます。竹矢町の竹矢岩船古墳、菅田町の菅田丘古墳、古曽志町の古曽志大谷1号墳、安来市荒島の宮山1号墳が代表で、福富町阿弥陀寺裏山５号墳、西川津町金崎１号墳や比津町比津小丸山古墳など、やや小型の古墳も前方後方墳になります。





５世紀後半の前方後方墳
（左：竹矢岩船古墳、右：古曽志大谷１号墳）

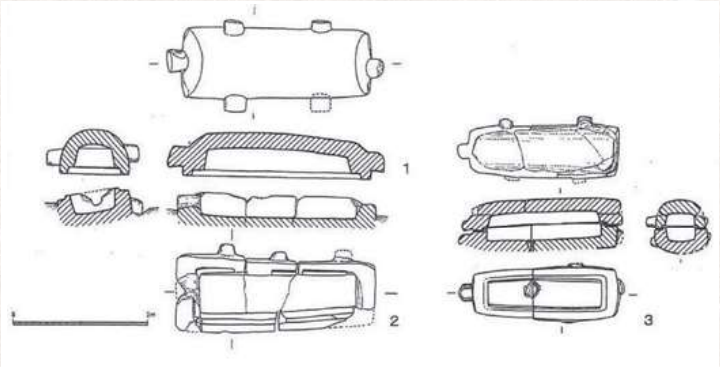
日本列島で異質な前方後方墳体制　古墳時代は、３世紀後半の巨大前方後円墳出現以来、後期の６世紀末ごろまで前方後円墳を最高位の墳形として、近畿地方を中心に全国で造られ続けます。５世紀前半の出雲は大方墳を作ることで、他地域と異なる立場をとっていましたが、それは大王墓の陪冢と同じ地位、という説明が



前期の前方後方墳、中期以降の前方後方墳、中期の大型方墳の分布図
（古代出雲歴史博物館2014より転載）

竹矢岩船古墳、神庭岩船古墳、徳連場古墳の舟形石棺
（個人蔵）

成り立ちました。しかし５世紀後半からの前方後方墳の首長墓化と築造増加は、ヤマトにも周辺諸地域にも見られない唯一の事象でした。古墳のほかの要素にも大きな変化が現れます。人物などの形象埴輪は造られなくなり、円筒埴輪の作り方も大王墓の系統から離れていきます。埋葬主体部には、出雲独特の舟形石棺が用いられ、それは出雲市斐川町の神庭岩船古墳にも広がります。神庭岩船古墳は前方後円墳ですが、規模は全長50m前後で、前方後方墳の地域首長古墳と同様の規模なのも注目されます。



２の石棺の身：竹矢岩船古墳、
１の石棺の蓋：神庭岩船古墳、
３　　：徳連場古墳の舟形石棺
（古代出雲歴史博物館2014より転載）

国家的制度の萌芽「人制」　同じ時期、ヤマト王権の大王墓にも大きな変化が生じています。陪冢が消滅し、大王墓の規模が全長300～400m級から100m級に縮小しました。『日本書紀』の天皇系譜でいうと、雄略大王の時代に相当します。この時代には、地方から豪族がヤマト王権の政治組織に直接参加し、行政上の重要な役割を担ったと考えられています。熊本県江田船山古墳の鉄刀に刻まれた「典曹人」や埼玉県稲荷山古墳の鉄刀に刻まれた「杖刀人」などの金石文は、雄略大王に仕えた事務官や武官の姿を表しており、国家機構の官僚制に近い制度的政治・行政が行われたと考えられています。「人制」と呼ばれているこの政治体制は、古墳で中央との関係や地位を表す古墳の意義を薄れさせる第一歩と考えられます。

出雲の前方後方墳集団と前方後円墳集団

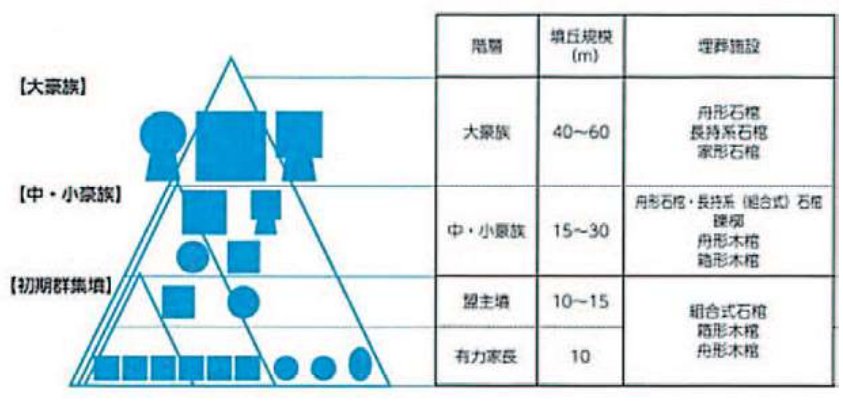
翻って出雲の地域色はどう考えたらよいのでしょう。直前までヤマト王権の大王家や有力豪族の重臣として活躍し、大王墓陪冢と同じ方墳を作った松江の豪族たちは、手のひらを返して中央に逆らったのでしょうか。

現在の有力な解釈はそうではありません。前方後円墳を頂点としてその形と規模で、ヤマト王権との関係や地域での地位を表す、古墳の在り方の意味が変容した中央の情勢を、意宇を中心とする松江の豪族たちはいち早く察知しました。古墳秩序のゆるみを利用して、出雲の中での独自の古墳表示の約束事を作って、

それをヤマトに認めさせたという考え方です。前方後方墳や方墳を中心とした、出雲の中での墳形ランクシステムが作り上げられたのでしょう。現代的にたとえれば、出雲は「古墳特区」として認められたと考えられます。これも、ヤマト王権との距離の近さ、重臣的地位の中で認められたと解釈されています。

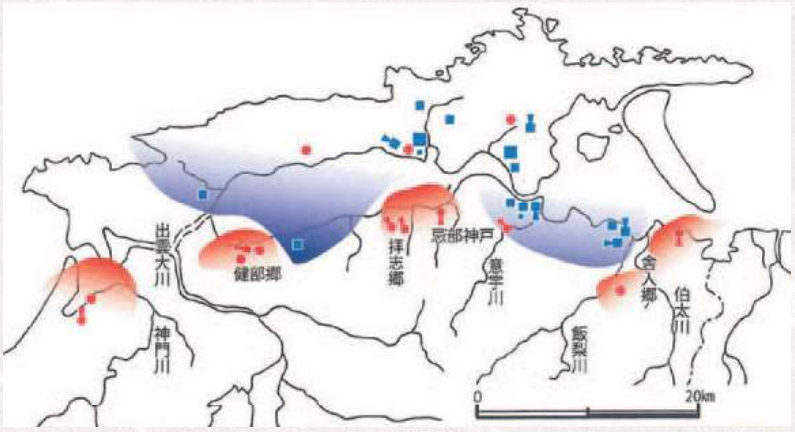
古曽志大谷１号墳空中写真

そして大型方墳を作って来た地域では、各地域のトップ首長は40～50m級前方後方墳、NO.２クラスは15～30m級の小型前方後方墳、それ以下の有力者は10mクラスないし10m以下の方墳、という方系を核とした墳形と規模による地域内の階層秩序が表象されたとうかがえます。一方で大型方墳が造られなかった地域は、同様のクラスの前方後円墳や円墳を造っています。大きさは変わりませんから、トップ首長たちは同列の力を示していますが、円系の古墳形態をとる出雲地方西部などの地域は、出雲内部で外戚として、異なる出自だったと思われます。



階層	墳丘規模(m)	埋葬施設
大豪族	40～60	舟形石棺 長持系石棺 家形石棺
中・小豪族	15～30	舟形石棺・長持系（組合式）石棺 箱棺 舟形木棺 箱形木棺
盟主墳	10～15	組合式石棺 箱形木棺 舟形木棺
有力家長	10	

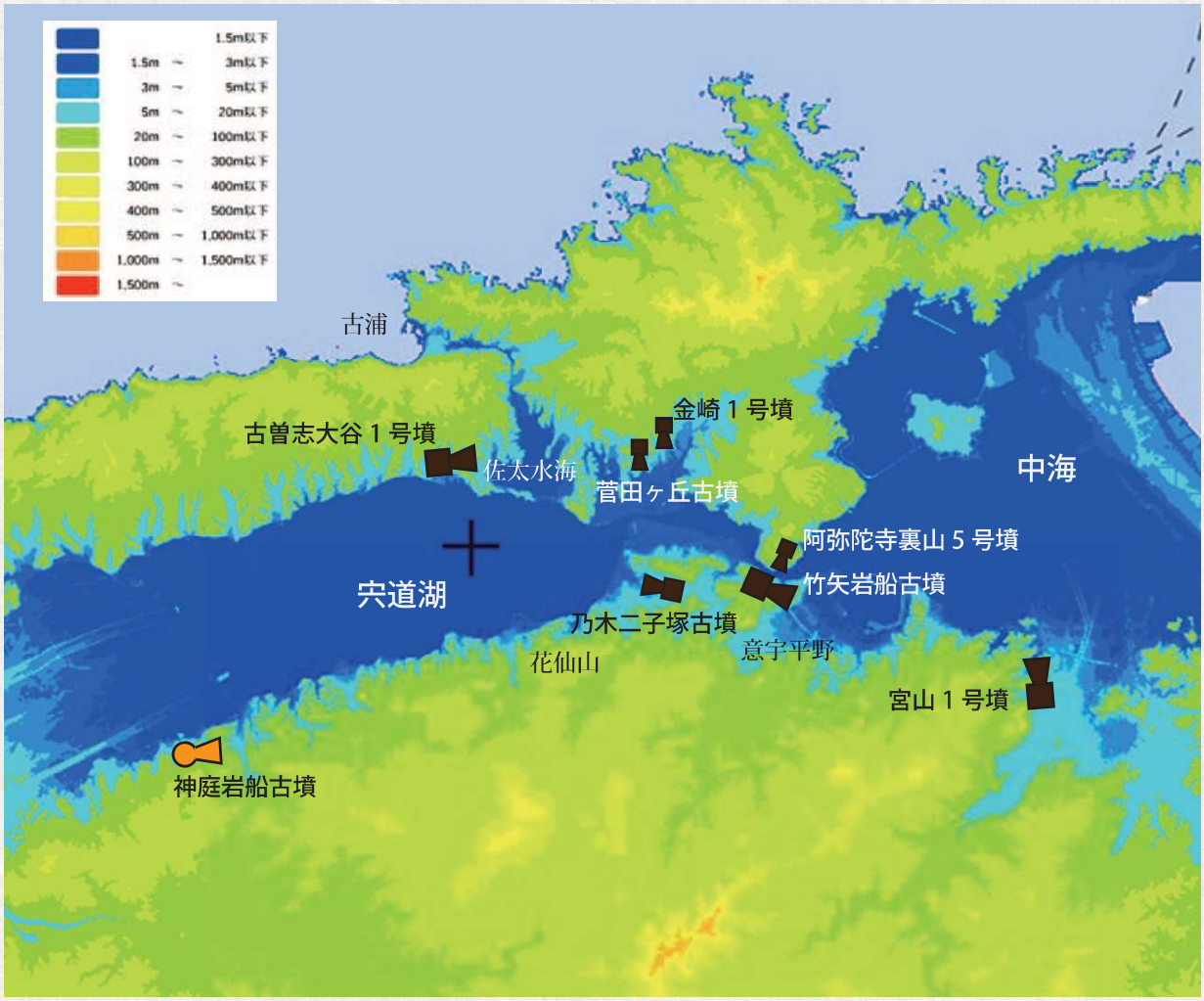
５世紀の出雲東部の古墳から見える階層
（古代出雲歴史博物館2014より転載）



５世紀の出雲の方系古墳と円系古墳の分布範囲
（島根県古代文化センター2015より転載）

東西出雲の萌芽　奈良時代の『出雲国風土記』では、松江周辺を拠点とする「出雲臣」と出雲市周辺を拠点とする「神戸臣（かんどのおみ）」の二つの大きな氏

族が記されていますが、両族は祖先を同じくすると書かれています。大きく見れば仲間だけれども、細かく見れば伝統的に異なる集団とされる、東西出雲の関係性が、前方後方墳の時代に始まっている可能性を示していると思います。神庭岩船古墳は出雲市斐川町で、松江周辺の古墳とは形が異なる円系の古墳ですが、主体部の舟形石棺は竹矢岩船古墳とそっくりで、規模も50m前後と地域首長クラスの前方後方墳と一緒です。墳丘が前方後円墳なのは、前方後方墳を一族のシンボルとした意宇勢力と、違いを明らかにするためだったと考えるのも一案です。その正否は置いておくとしても、５世紀後半以降、６世紀前半の前方後方墳の時代には、大規模・中規模の古墳は東部出雲の松江周辺に多く分布します。それは出雲を東西に貫く、幹線交通路の内水面を絞るように細くする大橋川をはさんだ、松江の地形的有利性が大きく働いたものと考えられます。



５世紀終わり頃の中型（30m級～50m級）の前方後方墳と前方後円墳
（内水域に面して作られている）

⑸出雲国造任命から出雲国府の設置へ

「出雲国造（いずものくにのみやつこ）」の古墳　６世紀の半ばころ、松江市山代町の茶臼山西麓に、山代二子塚古墳が築かれます。全長94ｍで周りに周溝をもつ、出雲で最大の前方後方墳です（６世紀の前方後方墳としては日本一）。埋葬主体部は不明ですが、長大な横穴式石室が存在するものと想定されています。古墳の斜面は石で飾られ、平坦面には他の古墳より大きな円筒埴輪が並べられました。淤宇宿禰（おうのすくね）の子孫と推測されるこの古墳に葬られた人物は、ついに出雲東部で圧倒的な古墳を築造したのです。

山代二子塚古墳（前方部から望む）（松尾充晶氏提供）

６世紀は日本の国家形成史上も大きな動きがあります。継体天皇以後、大王が世襲して即位することが確立して、ヤマト王権の基盤が整うとともに、地方を国で区分して地方長官としての「国造（くにのみやつこ）」を任命するようになります。おそらく、山代二子塚古墳に葬られた人物は、出雲

山代二子塚古墳空中写真

国造（あるいは淤宇国造）となった人物ではないでしょうか。長官任命の記念碑として、巨大古墳が造られたと考えるのが自然でしょう。「前方後円墳体制」と呼ばれる古墳づくりの約束事が続く中、ヤマトから任命された国造が、前方後方墳を作るところに出雲の自律性が感じ取れます。

出雲国府の成立　6世紀後半ごろ、出雲西部（現在の出雲市周辺）にも大きな前方後円墳や立派な横穴式石室を持つ古墳が造られます。出雲平野に新たな水田を開発する有力集団が現れたと考えられます。おそらくヤマトの大豪族をバックボーンにして、新田が開かれていったと推測され、松江周辺の東部とは異なる特徴の古墳が造られました。しかし、やがて意宇平野を基盤とする豪族の一族が、西部の有力豪族と手を結び、一つの出雲国の範囲が形作られていきました。東西を貫く内海水運を掌握していた東部の松江が、名実ともに出雲一国を代表する地域となっていったのです。

　そして7世紀の終わりごろには、意宇平野の中央南部に出雲国府がおかれ、ヤマトを中心とした律令に基づく政治や行政を執行する場所として発展しました。奈良時代には意宇（松江市南郊の意宇平野周辺）を本拠とする出雲臣氏が国造となり、松江市域南部の意宇郡だけでなく、他郡の郡司（国内に置かれた行政区域「郡」の代表行政官）にも名を連ねるようになったのです。

3．『出雲国風土記』に記された水

『出雲国風土記』は、奈良時代の天平５年（733年）に編纂された、古代出雲国について記された地誌です。「風土記」は和銅６年（713年）に元明天皇から各国に編纂が命じられたもので、現在にまで伝えられているのは、わずかに五国。しかもほぼ完本が残るのは『出雲国風土記』だけです。『出雲国風土記』には、多くの水に関わる記載があります。それらの代表的なものをお話してみたいと思います。なお、現在の松江市域は意宇（おう）郡（現在の安来市域は除く）、島根郡（北部の佐陀川から東側）、秋鹿（あいか）郡（佐陀川より西側から、出雲市伊野町を除いた部分）にあたりますので、その項を中心に記します。

(1)「大海」と「入海」

松江の水を代表する日本海は「大海」、宍道湖と中海をつなぐ東西の内海は「入海」と記されています。いずれの水域にも、多くの記載があり、水域に浮かぶ「島」、沿岸の「浜」「浦」「埼」「促戸（せと）」という呼び名がつけられています。

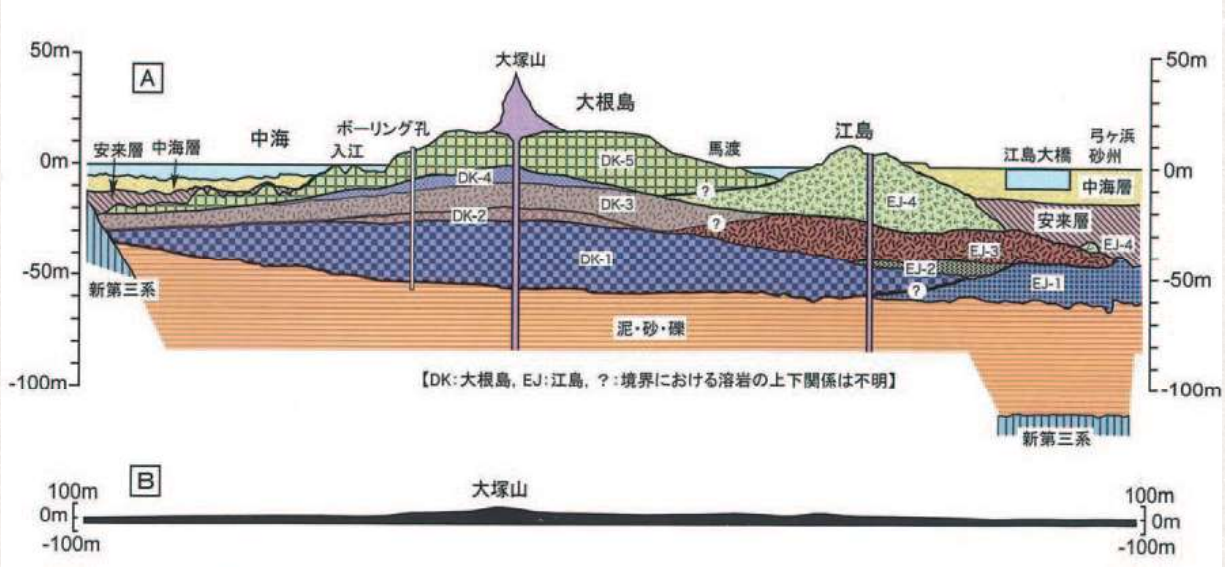
大根島・江島　中海に浮かぶ大根島は蜘蛛島（たこしま）、江島は蜈蚣島（むかでしま）と記されています。大根島・江島は約20万年前に噴火した火山で、その頂上部分が中海に顔を出しているのです。ですので、島全体は玄武岩と呼ばれる溶岩が冷えて固まった岩石が基盤となっています。この石は、江戸時代以降に切り出され、船で松江城下町に運ばれて、建物の基盤・基礎などに使われました。黒くて硬い島石は、泡状に小さな空洞があり、見栄えもいいこともあって、近年まで石垣などにもよく利用されています。今でも中海湖岸に切り出した島石が転がっているのを見ることができます。

ところで『出雲国風土記』には、土地は豊かに肥えている、と記され、江戸時代以降の人参栽培などにもつながるものと思われます。また、牧あり、との記述から、馬を放牧して育てていたと考えられます。周りを水域で囲まれて、豊かな土地が牧草を生やす大根島は、牧場にぴったりだったことでしょう。

興雲閣の基礎に使われた島石

江島は大根島よりは小さい島ですが、『風土記』では記載が多く、両島の村の中心は江島にあったようです。大根島は牧場としての利用が重要だったからかもしれません。

南から見た大根島（左）と江島（右）



大根島と江島の高さを強調した地質断面図
（平たい基盤の割れ目から溶岩が噴出し、その頂上部分が中海の中に現れています。）
（『松江市史 史料編 1 自然環境』より転載）

水の景勝地・遊興地　水が見えるところは人々の心を癒し、景色を愛でたり娯楽に行ったりするのは、現代も古代も同じようです。入海、大海、川、池などが景勝地や遊興地として『出雲国風土記』に登場します。まずは、中海沿いの朝酌地域にある2つの景勝地を紹介しましょう。「**邑美清水**（おほみのしみづ）」は大井町の集落と大海崎町集落の間にある、「**目無水**（めなしみず）」と呼ばれる泉の場所と考えら

目無水から中海を望む

れます。もう一つの「**前原埼**（さきはらのさき）」は大海崎町の東に飛び出た岬と考えられます。どちらも眼前に水域が広がり、遠くには大山をはじめとした山や中海沿岸を望むことができます。どちらの場所でも、老若男女が集って宴会をする場と記載されていますので、景色を見ながら楽しむ遊興地でもありました。このような人々の遊興地は、川のほとりの交通の要所にもありました。「**忌部神戸**（いむべのかむべ）」の条には、川辺に温泉が湧き、老若男女が道を行き交い、海を浜辺に沿って行き、入り乱れて宴を楽しむ、と書かれます。今の**玉造温泉**あたりのことです。温泉を楽しむと同時に東西の古代山陰道と南の大原郡に行く道が交差する点も、人々が集う要因だったのでしょう。「**朝酌促戸**（あさくみのせと）」は、今の大橋川が最も狭まる場所で、隠岐に向かって船が渡る渡し場もありました。人々が四方から集まってきて市が立ち、にぎやかだったことが分かります。**矢田の渡し**近辺のことです。

大海崎港から「前原陂」あたりを望む
（目の前が入海で三方を山で囲まれます。）

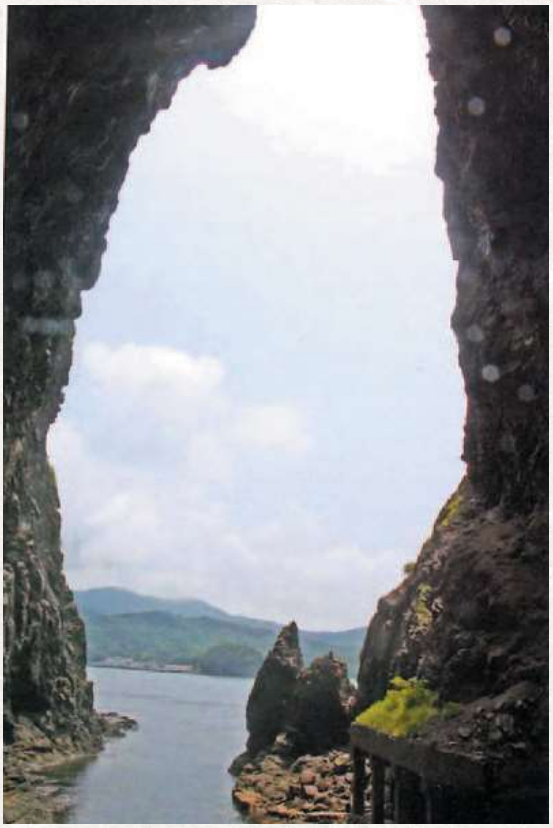
中海に突き出た「前原埼」

中海方面から「朝酌促戸」方向を望む
（右奥の狭くなるあたりが朝酌促戸）

嫁ヶ島

現在の**嫁ヶ島**も景勝地だった可能性があります。入海の条にわざわざ野代の海の中に「**蚊島**（かしま）」があると記され、あえて特定の場所が明らかにされています。また小さな島なのに、木が一本あるのみ、など詳しい記載が見られます。近代以降の袖師浦（そでしがうら）に対応するような景勝地と考えられます。

日本海に面した景勝地も書かれています。最も詳しいのは「**加賀神埼**」、今の加賀**潜戸**です。窟、つまり洞穴があって、貫通していることが記され、「佐太大神」つまり佐太神社に祀られる松江市北部の大神さまが生まれたところ、という伝承が付け加えられています。自然の壮大な地形には心打たれ、しばしば言い伝えが残って名所になるパターンです。「埼」という記載は、景勝地の意味を含んでいるようにも思えます。ほかに、「**勝間埼**（かつまのさき）」（**片江と菅浦の間の岬**）と「**手結埼**（たゆいのさき）」には、加賀神埼と同様に窟があると記されますし、**美保埼**は今の**地蔵崎**、**瀬崎**は**多古の七つ穴**がある場所です。名勝・天然記念物やジオサイトに指定されている場所と重なっているのが分かります。


潜戸

古代（奈良時代）でも、水が人々に大きな安らぎを提供していたことは間違いありません。景色を愛で、宴が好きなのも同じです。このような風土が松江の文化を生み出し、はぐくんできたといって過言ではないでしょう。

濱と浦と嶋　松江市内18か所の浜、４か所の浦、64か所の島が『出雲国風土記』の入海と大海の項に記載されています。通常、浜は砂浜などを、浦は深く湾入したところを指しますが、風土記では浜や浦は、海沿いの集落があるところを指しているようです。浦には船が停泊できる数が記載されているので、軍事用の港、あるいは公的な港とする考えが有力です。いずれにしても、海浜部に数多くの集落が存在し、人々が生活を営んでいたことは間違いありません。古代から水の豊かな幸を享受してきたのです。

膨大な島が記載されている理由は、謎の一つです。多くの島に水産物や動植物も記されているので、それぞれの島に意味があったと思われます。小さな島でも記されているのは、管理や占有権などの意味合いがあった可能性があります。現在、歩いて渡ることのできる島が加賀港の近くの**桂島**です。海岸との間に橋（神埼橋）が架かっていて、海水浴場として整備された島に行けます。さらに東の

櫛島の間には江戸時代に造られた堤防（築堤）があります。桂島は『出雲国風土記』に「**葛嶋**」と、櫛島は同名で「**櫛嶋**」と記されています。桂島の北側にある**栗島**、**馬島**、西側の**平島**、**赤島**も『風土記』で「**許意嶋**（こしま）」、「**真嶋**」、「**比羅嶋**」、「**赤嶋**」として記載があります。いずれもよく名前を残しています。加賀は「加賀神埼」の項で、佐太大神にちなんだ伝承や神話とっても詳しく書かれています。古代出雲にとって意味深い重要な地だったことから周囲の島も詳細を記しているのかもしれません。なお、桂島と櫛島の間をつなぐ築堤は、松平不昧が藩主時代に、加賀港を波浪から護るために松江藩が築いたものです。

桂島と櫛島の間をつなぐ築堤

桂島（左）と櫛島（中央右）、
桂島の向こうに栗島、馬島が見えます

築島の岩脈

島根半島最大の島として野波地区の**築島**の記載も紹介しておきましょう。『出雲国風土記』には「**附嶋**（つきしま）」と記載されてあります。多くの草木が記されていて、特にヨメナ（ウハギ）が正月の元日には六寸（約1.8m）になると書かれています。正月に野菊の一種、ヨメナが食べられて、その産地だったことを示すものかもしれません。また、島の周囲の崖では、火山岩に貫入する岩脈が見られ、まれにしか見られない地質遺産として国の天然記念物に指定されています。

島根半島の島々は、周囲が岸壁や磯のところが多く、様々な海藻や貝類の絶好の採取場でした。また基本的に無人島なので、草木も本土側では育ちにくいものもあったことは想像に難くありません。『出雲国風土記』の数多くの記載は、

島々が豊かな海の幸をもたらしたことを示しているのでしょう。後世のことではありますが、江戸時代以降には隣り合う浦々で、島の占有権で諍いがしばしば起きていることも、島の豊かさを示しています。

美保関町惣津から見た海岸と粟嶋（青島、右下）

島根町櫛島から見た
葛嶋（桂島）と真嶋（馬島、桂島の奥）

⑵ 内陸の水域　―水海・池・陂・坡（つつみ）―

水海は『出雲国風土記』に２か所記載されています。神戸郡の「**神戸水海**」と松江市生馬地区から古江地区に広がる「**佐太水海**（さだのみづうみ）」です。いずれも周囲が広く、一定の広さ以上のものを指しているようです。池は現在でいう土手で仕切られた池、坡（陂）は自然にできた池で水海よりは狭いものを指していると考えられます。

佐太水海　佐太水海は佐陀川下流域に広がっていた水域で、現在は**潟ノ内**としてごく一部が残っています。その周りが七里とあるので、周囲が４km前後の広さがあったものと考えられます。現在の湖北の平野のかなりの部分が水域であり、また低湿地だったことがうかがえます。**佐太河**がこの水海に合流すると書かれており、その源流は多久川と秋鹿郡渡村の２か所ある、とされています。多久川は講武川、渡村は現在の佐太神社の西あたりと考えられま

潟ノ内（背景は朝日山）

すので、日本海と宍道湖を結ぶ交通の要衝だったのでしょう。水海の北岸に近い浜佐田町石田遺跡で港湾を思わせる文字を書いた土器が見つかっており、水海内に港があった可能性があります。

池　松江市内に比定される池は意宇郡に２、島根郡に５、秋鹿郡に４か所、合計11か所が記載されています。池は周りと魚類や水鳥、水草などは記されているものの、郡家からの方位や里程は記されないので、現在の場所を厳密に検討することは難しいといえます。研究の中では、その周囲や遺称地から検討は進められています。意宇郡と嶋根郡から代表的な池を一つずつ紹介しましょう。

意宇郡の「**真名猪**（まない）**池**」は矢田町の**蟹穴池**と考えられています。茶臼山の東側で、現在も間内という字が残り、茶臼山には真名井神社や真名井の滝があります。周一里も現在の蟹穴池とおおむね一致します。

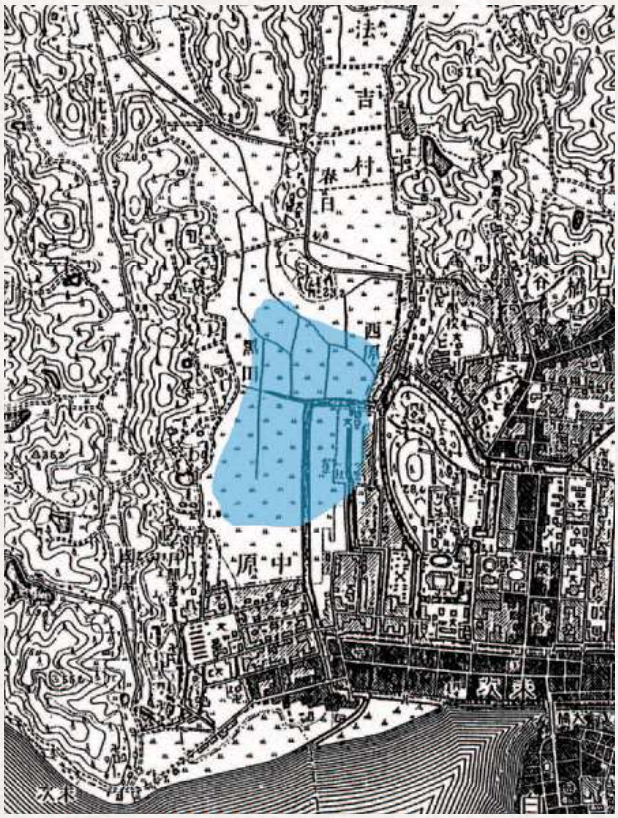
嶋根郡の「**張田**（はりた）**池**」は西生馬町の**半田池**と考えられています。張田は墾田（はりた）が元の名前とする説があり、そうであれば新たな水田開発に伴って造られた灌漑池ということになります。

半田池（西生馬町）

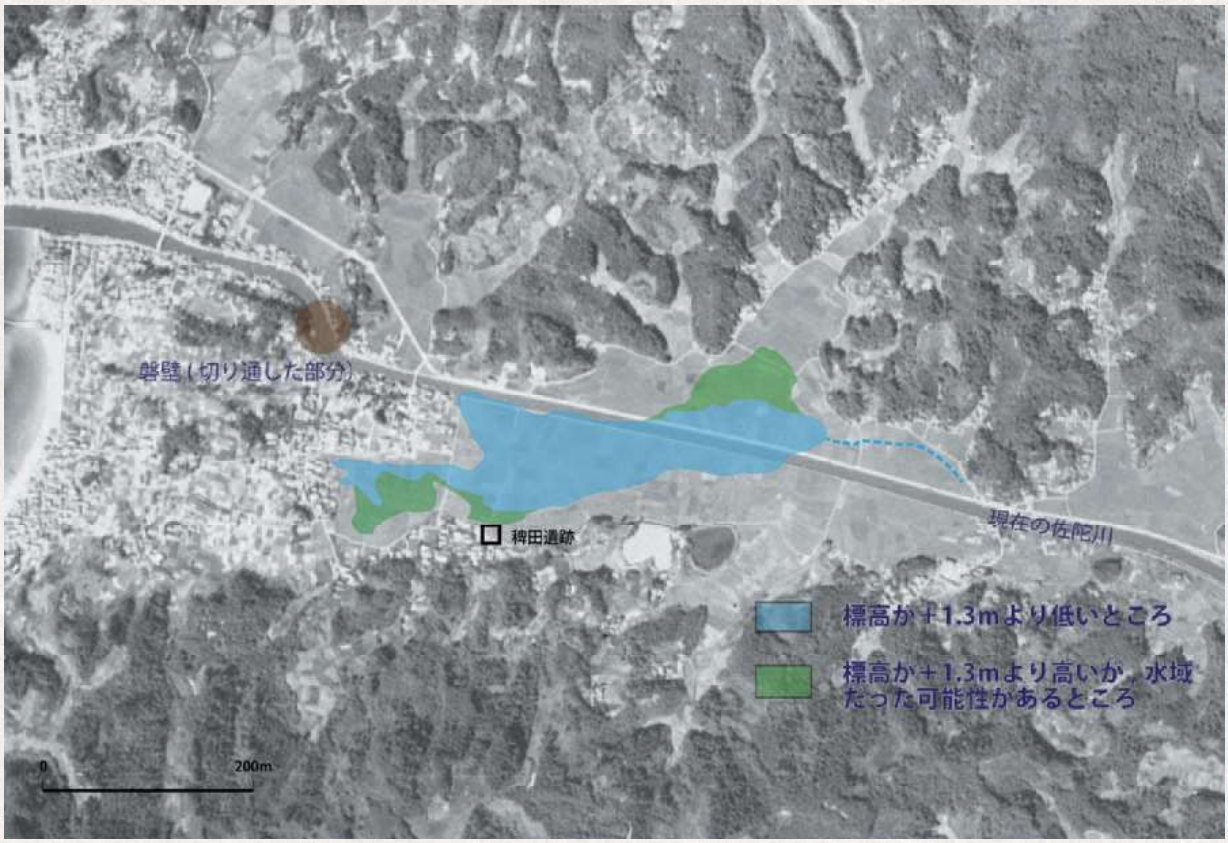
坡・陂（つつみ）　つつみ、というと人工池を思い起こしますが、『出雲国風土記』では自然に水がたまった池や小潟湖を指しています。嶋根郡には「**法吉**（ほうき）**坡**」と「**恵曇**（えとも）**陂**」が記されています。

「法吉坡」は現在の**黒田町周辺の低地**がその痕跡です。もとは宍道湖から湾入して入海の一部だったところに、砂嘴（さし）が伸びて入海との間をふさぎ、大きな池となったものと考えられます。黒田の地名は、もとは水域だったところに植物が生えて溜まり、それが黒い「おもかす」となって水田の下に溜まっていることが、その命名の理由だと推測されます。黒田では水田が低く水分が多いことから、「黒田セリ」が名物でした。舟で水田をめぐり、セリの栽培をしていたといいます。いまでも、大雨が降ると最初に冠水する場所の一つです。

鹿島町古浦の砂丘の背後（東側）には「**恵曇陂**」がありました。砂丘にさえぎられ、上流から流れてきた水が溜まって深い池があったようです。今の佐陀本郷あたりの水田だったところが、池だったのです。佐陀本郷の南側丘陵に近い稗田遺跡の調査では、弥生時代後期ごろ（２世紀ごろ）まで水が溜まっていた状況が発掘調査で明らかになり、広い水域があったことが分かります。古墳時代後期（６世紀後半ごろ）には水田化されていて、池の水際付近の水田開発が進んでいることをうかがわせています。しかし、水分の多い湿田だったと推定されています。



奈良時代の法吉陂の推定範囲
（明治23年地形図をもとに
島根県古代文化センター2023を参考に作成）



奈良時代の恵曇陂の推定範囲
（昭和23年空中写真に高安1997を参考に作成）

恵曇陂にかかわって、『出雲国風土記』はもう一つ興味深い伝承を伝えています。池の水を海に流すために、岩壁を削って流路を造った、という伝承です。それによって、上流域の水がはけて、水田の範囲を広げることができたのです。この伝承は、風土記作成当時に島根郡の郡司の長官（大領）だった「社辺臣訓麻呂（こそべのおみくにまろ）」の祖先たちが、水田経営の拡大を狙って行った、と具体的に記載されていますので、『出雲国風土記』作成以前の本当の出来事と考えられます。現在も佐陀川の下流には山を切り割った岩壁らしきものを観察することができます。江戸時代の清原太兵衛の佐陀川掘削にもつながるような大事業が、８世紀前半以前に行われたことは驚きです。

佐陀川の両岸が岩の部分
（鹿島町古浦）

⑶ 河川

意宇郡に９、嶋根郡に５（多久川が脱落している説もあります）、秋鹿郡に６、合計20の河川が記されています。そのうち現在の松江市を流れる川は16河川です。川の記載は、Ａ.川の源流（山が多い）、Ｂ.流れる方位、Ｃ.河口の場所、Ｄ.魚の有無や種類、が定型的に書かれています。松江市に関係する川の一覧は以下の通りです。（※P.76掲載）

河と川は同じか　一覧表を見ると、「河」と「川」の二種類があることが分かります。意識的に使い分けられていたものかは不明ですが、河を使っているのは飯梨河、意宇（おう）河、水草（みくさ）河、佐太河の四つです。これらは郡もしくは郡内の大きな地域を代表する河川と考えることもできます。他の郡では「川」と「小川」が使い分けられていますが、松江市にかかわる三郡には小川がありませんので、「河」に特別な意味を込めていたとも想像できます。

また、入海南岸の意宇郡の川には年魚（あゆ）や伊久比（いぐい）が記されるのに対し、北岸の島根郡・秋鹿郡の川には年魚などはなく、鮒（ふな）が記され

ます。島根半島を源流とする川ではアユやウグイが捕れなかったのか、出雲国府などに上納する魚の種類が郡によって分担があったのか、特に意味がないのか、実態は分かりません。でも何らかの意味を見出したくなりますね。それでは代表的な「河」について紹介しましょう。

	郡	記載名	比定河川	源流	源流比定地	通過地	合流地	比定地	産物
1	意宇郡	伯太川	伯太川	葛野山	東比田の山か	母里・ 楯縫・ 安来の三郷	入海	中海	年魚 - 伊久比
2	意宇郡	山国川	吉田川	枯見山	羽根ヶ谷山か		伯太川	伯太川	
3	意宇郡	飯梨河	飯梨川	田原・ 枯見・ 玉嶺山	三郡山・ 羽根ヶ谷山か・ 玉峰山		入海	中海	年魚 - 伊久比
4	意宇郡	筑湯川	意東川	荻山	星上山		入海	中海	年魚
5	意宇郡	意宇河	意宇川	熊野山	天狗山		入海	中海	年魚 - 伊久比
6	意宇郡	野代川	忌部川 (野代川)	須我山	八雲山～三笠山		入海	宍道湖	年魚 - 伊久比
7	意宇郡	玉作川	玉湯川	□志山	葦山（城床山）		入海	宍道湖	年魚
8	意宇郡	来待川	来待川	和名佐山	上来待和名佐 北部の山	山田村	入海	宍道湖	年魚
9	意宇郡	完道川	佐々布川	幡屋山	馬鞍山		入海	宍道湖	魚無し
10	嶋根郡	水草河	朝酌川	毛志山	澄水山		入海	宍道湖	鮒
11	嶋根郡	長見川	長海川	大倉山	枕木山		入海	中海	鮒
12	嶋根郡	丈鳥川	椎木川	墓野山	忠山		入海	中海	
13	嶋根郡	野浪川	千酌路川、 里路川	糸江山	三坂山		大海	日本海	
14	嶋根郡	加賀川	澄水川	脱落か	脱落か		脱落か	脱落か	
15	嶋根郡	（多久川）	（講武川）	（小倉山）	太平山				
16	秋鹿郡	佐太河	講武川	多久川・ 渡村	講武川・ 佐太神社付近の 分水嶺		佐太水海 入海	潟ノ内 宍道湖	鮒
17	秋鹿郡	山田川	秋鹿川 or 古曽志川	湯火山	秋鹿町山中 あたりの山		入海	宍道湖	魚無し
18	秋鹿郡	多太川	岡本川	安心高野	本宮山		入海	宍道湖	魚無し
19	秋鹿郡	大野川	大野川	磐門山	譲葉山 or 蛇喰山		入海	宍道湖	魚無し
20	秋鹿郡	草野川	草野川	大継山	大空山 or 門原の山 or 秋葉山		入海	宍道湖	魚無し
21	秋鹿郡	伊農川	伊野川 or 小境川	伊農山	秋葉山		入海	宍道湖	魚無し

意宇河（意宇川）　古代は「おうがは」と訓がついていますが、今は「いうがわ」と呼びます。源流は現在の天狗山ですが、途中で星上山から流れ出る東岩坂川が合流します。古代出雲の中心地となる意宇平野にたくさんの土砂を流し、平野の形成を促した河川です。風土記勘造責任者だった出雲国造（古代出雲の豪族のトップ）にとって、特別な河だったことは想像に難くありません。天狗山（熊野山）は、出雲国造が奉斎する熊野大社があったと風土記には記されています。豊穣と災いをつかさどる神聖な山であり、そこを水源とする意宇川は神聖な河だったのでしょう。

現在の意宇川と東岩坂川の合流地点付近では、大規模な祭りが行われた前田遺跡があり、古墳時代以降の豪族が祭祀を行っていました。また、５世紀ころには意宇平野の水田開発のために、下流の流路を変える大工事が行われた可能性が高いことも前に述べました。意宇川は、淤宇宿禰（後の出雲国造）と呼ばれ、『出雲国風土記』の編纂責任者であった、出雲を代表する豪族・出雲臣にとって、母なる川だったことは間違いありません。

意宇川
（大草町付近、背後は茶臼山）

意宇川中流
（八雲町熊野大社付近）

佐太河　現在の佐陀川は、江戸時代に藩命で清原太兵衛により排水路・運河として開削されて、日本海とつながっていますが、古代は鹿島町内から流れ出て、佐太水海に入り、入海（宍道湖）に流れ込む川でした。水源は多久川（今の講武川）ですが、風土記には西側にもう一つの水源が「渡村」と記されています。川

の名前ではないため、現在の佐太神社付近の泉か湧水から流れる小川だったと推測されます。わざわざ渡村に源流を求めているのは、佐太大神がふもとに鎮座する神名火山が水源であることを明示するとともに、恵曇陂の水源も渡村の水田にあることと関係するのでしょう。

現在の講武川上流 奥に見える山は大平山
（佐太河の源）

佐陀川河口から北を望む（西浜佐陀町）
見える山は大平山（水草河の源）

佐太河は『出雲国風土記』では嶋根郡と秋鹿郡の境となっていますが、佐太河と佐太水海の周辺地域こそが、風土記冒頭の国引き詞章で登場する「佐太国」の中心と考えられています。また嶋根郡の郡司大領（長官）だった社辺臣（こそべのおみ）氏は、現在の古曽志町付近、つまり佐太国が本願地だったと推測されます。奈良時代以前には、松江市北部は同じ文化圏を形成していた可能性が高いのです。佐太河は古代の佐太国の聖なる河だったといえるでしょう。

水草河　現在の朝酌川を本流とする川と考えられます。源流は二つあって、ともに毛志山（現在の澄水山）とあります。一つは最も東側で本庄地区との境となる福原町の上流と考えられ、もう一つは坂本川説と持田川説があります。澄水山は幅広で南北の奥行きもあるため、候補の川は諸説あるわけです。どちらかと言えば、流域面積が広くて西持田町の谷にも分岐する持田川が有力と考えられます。

朝酌川（水草河）の二つの源流　左：坂本川源流の草野神社裏、右：持田川源流の納蔵の白滝

朝酌川（水草河）中流
（貝埼橋から南、西川津遺跡方向を見る）

ところで、朝酌川流域は松江市北東部では最大の平野が広がり、弥生時代には松江で最大の拠点集落、西川津遺跡が営まれました。有力古墳も多くみられる地域で、島根郡家（ぐうけ：郡の役所）の所在地は確定していませんが、持田地区にあることは確実と言えます。よって水草河は嶋根郡の有力豪族にとって重要な河川だったといえるでしょう。松江市の北東部は、「国引き詞章」でいう「闇見国（くらみのくに）」にあたると考えられます。「くら」は倉の意味だという解釈がありますが、「**毛志山**」（澄水山）の両側を、「**大倉山**」（現在の枕木山）と「**小倉山**」（現在の大平山）がはさんでそびえています。これらの「倉」の山の南ふもとを水草河は流れていたことになるのです。

交通路としての河・川　出雲国の平野部は、東西に入海や水海を中心とした低地部が縦断し、水上交通の大動脈だったことは前にも述べました。河や川が、大動脈につながる支線として、人や物が移動する舟の交通路だったことは想像に難く

ありません。ダムや砂防堰堤のない古代には、河川はもっと深く、中流域くらいまでは舟の往復が十分可能だったと考えられます。『出雲国風土記』に記された河川は、大動脈から派生する動脈であり、その支流や大規模な水田経営のための水路は毛細血管のような働きをして、地域同士の物流を支えていたものと考えられます。

⑷ 奈良時代（律令制の時代）に水が果たした役割

『出雲国風土記』は、出雲国（地方）の目線で事実と伝承を伝えています。記載の中身からは、水の重要性として次の四つを読み取ることができます。

① 水産物（生業） 大海（日本海）、入海（宍道湖・中海・大橋川）、水海（ラグーン・潟湖）、池・陂（灌漑池・自然池）、河川にそれぞれ採れる魚、貝類、海藻などの水生生物や水鳥が記載されています。書かれている産物は平城京への貢納物だったり、出雲国府などの役所で行われる儀礼用、あるいは薬用として有用だった品などが選ばれていたと考えられますが、それにしてもたくさんの種類です。今でも同じですが、様々な水環境に恵まれた松江ならではのことと言えましょう。

② 交通・流通 出雲国、とりわけ現在の島根半島は環日本海交通の要所です。西からも東からも北からも、船が停泊する絶好の条件を備えているのです。大海の記述が多いのは、自国船や他国船が停泊する場所や周辺の条件が重要だったからでしょう。多様な文化の受け口だったと考えられます。一方、島根半島と中国山地から北に延びる「本土」との間には、入海が貫通します。いつの時代も同様ですが、国内沿岸部の交通や流通には至極便利だったことは間違いありません。今のように、湖を別々に呼ばないのは、内水面が一体化した交通路だったからではないでしょうか。

③ 軍事 ７世紀の後半になると、律令によって国家の仕組みや政治・行政の執行方法が定められます。国家として対外防備のための軍や兵隊の組織制度も整いました。諸国には軍事組織の基本をなす軍団が置かれました。

『出雲国風土記』によれば、松江市内の出雲国府付近に置かれた「**意宇軍団**」はじめ、出雲国の３か所に軍団がおかれました。軍団はふつう1000人の兵士（ひょうじ）で構成され，地元から男子が順番に徴兵されたものと考えられま

す。そのほかに、狼煙を上げて危急の通信を行う烽（とぶひ）や警備・監視施設の戍（まもり）が設置されています。海岸の瀬崎には戍が設置されており、海からの侵略に備えられていたことが分かります。また「浦」が４か所記載されていますが、そのうち３か所は松江市内にあたります。浦には停泊できる船の数が記されており、軍船だという説も有力です。

『出雲国風土記』が完成する１年前の天平４年（732）に、諸国の軍団を統括する臨時組織、節度使（せつどし）が置かれます。山陰道・西海道の節度使は、直接西の国境の防備を強固にするために設置されたとされ、唐や新羅との緊張関係に対処するためと考えられています。島根半島は国家の防備のために、大切な拠点だったのでしょう。

④ 水田経営の基盤としての水　古代の国家にとって、税収の基本は米にありました。国民を戸籍で把握し、田を正確に分けるために一町四方（一辺約105mで１.１ヘクタール前後）に水田を区画しました（条里制）。水田を経営するためには田に水を引くことが不可欠で、その水源として池（灌漑池・堤池）が造られ、また川や湧水地から水が引かれました。川や池の源がどこにあるかは、とても大切なことだったようで、川には必ず水源が記されます。そして水を生む山や水源地・分水地は、しばしば信仰の対象となるとともに、人々の饗宴の地となったのです。

⑸ 八束水臣津野命（やつかみず　おみづぬ　のみこと）は水の神

『出雲国風土記』では「出雲」と名付けた神として、そして国引きで出雲を形作った神として、八束水臣津野命が登場します。『古事記』などの日本神話では、高天原の天照大神（あまてらすおおみかみ）が最高神として位置づけられますが、出雲国風土記が描く出雲地域の最高神は、八束水臣津野命と言ってよいでしょう。この神は別のくだりで「意美豆努命（おみづぬのみこと）」と書かれますので、八束水は神を形容する枕詞のような役割を果たしています。八方の水を束ねる、ということは、まさに出雲の最高神としてすべての水を統御する、というと大げさでしょうか。「おみづぬ」は大水の意とすれば、重ねて水の大神だったということでしょう。出雲国を統べることは、水を統括することだった、と考えられるのです。

4．水運が支えた中世の中心地

(1) 出雲国府の衰退と府中の成立 ―中海沿岸に港形成―

陸路の衰退と中海沿岸の隆盛　出雲国の政治・行政の中心だった国府は、意宇川に接するとともに、古代に整備された山陰道と隠岐や宍道湖北岸を通る枉北道（きたにまがれるみち）の交差点でした。しかし、古代の律令制が機能しなくなるとともに、陸路である古代幹線道の機能も縮小していき、10世紀ころを境にして国府は縮小していきます。集約的に整備された庁舎などは、小規模になって周辺に分かれていき、府中と名を変えて存続しました。しかし13世紀ころ、国府周辺を大規模な水害が襲い、その表面は礫まじりの砂層に覆われてしまいました。鎌倉時代の歴史を記した『吾妻鏡』などによれば、寛喜２～３年（1230～1231）に「寛喜の大飢饉」と呼ばれる異常気象に見舞われたそうです。出雲国府跡に残された大洪水の痕跡は、この歴史的災害にかかわる可能性もあります。

それと前後するように、政治や経済の中心は中海沿岸の竹矢地区に移っていきます。その要因は複数あったと考えらえますが、一つは舟の構造が変わることで、古代に比べて大規模な船が諸国を回遊するようになったことがあげられます。古代は準構造船と呼ばれる、船底に丸木舟を利用したものだったため、潟湖や河川など比較的浅い内水面に港が造られる傾向にありました。ところが中世以降、構造船と呼ばれる船底を木材で組み合わせて作る大型船が使われるようになると、船底が一定程度沈んだ状態で航行するため、沿岸が深い港が発達するようになったのです。中型以上の船は意宇川をさかのぼることなく、中海の西にあった揖屋湾周辺や大橋川入り口の馬潟あたりの主要な港に停泊するようになりました。すると流通・経済の中心が港周辺に移り、それに合わせて府中の中心も竹矢周辺に移動しました。

大橋川の東側入口
（左手前には現在の馬潟港が見えます。）

平浜八幡宮と八幡荘の成立　中世には、国家や地方行政を担う国府などの公の力が相対的に衰え、寺社勢力が大きな権力を持つようになります。平安時代から鎌倉時代にかけて、全国的に領地を保有し、公権力とも結びついて大きな力を持ったのが、京都の石清水（いわしみず）八幡宮です。12世紀前半には、中海を望む竹矢の地に石清水八幡宮の末社としての、平浜別宮が成立しました。あわせてその周辺に、八幡荘と呼ばれる荘園ができたのです。

中海から宍道湖へ抜けていく水上交通の要衝に位置した平浜八幡宮は、石清水八幡宮とその背後に連なる都の権力を後ろ盾に出雲府中の権力と結びつき、公的な宗教施設としての役割を果たしました。また所領（荘園）からの収入のみならず、津（港）に入る船荷を掌握することで、多くの収益を得たものと推測されます。平浜八幡宮は、

平浜八幡宮社殿
（松江市八幡町）

平浜八幡宮周辺の古代地形復元図と浜分Ⅱ遺跡の位置

中海に近い丘の上に鎮座しました。中海を通って港や大橋川に入ってくる船からは、その姿がよく見えたことでしょう。大橋川沿岸に大型古墳を築造した５世紀と同様に、竹矢周辺地域の中心性をアピールする、モニュメンタルな役割を果たしたものと推測されます。

都の有力者が立てた荘園には税金（年貢）がかからない特権がありました。実際に農耕地を管理運営するのは、地元の有力者たちですので、別宮には手数料を払う必要があるものの、高い年貢が免除されます。また津を荘園地内に設けることで、都や諸国にある石清水八幡宮の所領から運ばれる船荷を優先的に差配できました。つまり、石清水八幡宮は所領が増えると同時に、府中周辺の有力者は実質的な収益増を見込めました。都の有力者と地方の有力者が、持ちつ持たれつの関係を取り結んでいたと考えられるのです。

八幡津の発見　中世ごろ、平浜八幡宮の南には現在の意宇川が屈曲して東に流れ、中海に注いでいました。意宇川河口付近の北岸には砂がたまって、小高い微高地ができていました。現在の浜分集落です。この集落の地下には遺跡（浜分Ⅱ遺跡など）があることが知られていましたが、近年の部分的な発掘調査で、中世（13世紀ごろ）の港にかかわるものが見つかりました。集落の地盤は砂ですが、その上に黒い砂が堆積していて、数多くの遺物が出土しました。焼き物では中国から輸入された青磁や白磁、京都で作られたかわらけ、常滑（とこなめ：愛知県）の壺などが出ています。土中に水分が多いため、木で作られた製品がたくさん出ているのも特徴で、漆塗りのお椀や折敷（おしき：食べ物を乗せる台）、多数の箸が出ていて、身分の高い人が食事をしたことがうかがえます。また桶や曲物（まげもの）などの容器、下駄、木札などが代表的です。水産の食物残滓としてはアカニシやハマグリ、タイの骨、水鳥の骨なども出ています。いわば食堂のような施設があったのでしょう。

浜分Ⅱ遺跡の発掘調査風景
（黒い砂の中から多くの遺物が出ています。）

浜分Ⅱ遺跡から出てきたアカニシ、ハマグリとタイの骨（左）と中国の青磁・白磁（右）

調査区の中で黒い砂の層は途切れ、それに沿って杭が打ってありました。ちょうど中海との汀線にあたると考えられ、船着き場があった可能性が高いと考えられます。中海に突き出した小高いところに港と、そこで荷揚げをしたり舟に乗っている人が食事をする場所、つまり港町があったと考えられます。13世紀ころの焼物類がまとまって出ていますので、平浜八幡宮や八幡荘の公式の港だったと考えていいでしょう。

時代は下って14世紀の中ごろには、浜分Ⅱ遺跡から意宇川旧流路をはさんだ南に、安国寺が設置されます。安国寺は、室町幕府を開いた足利尊氏が、国土の安全と平和を願うために全国に設置したいわば官寺で、出雲では平浜八幡宮近くの竹矢郷にあった円通寺があてられました。貞和二年（1346）には、将軍足利尊氏から各地の所領が寄進されており、隆盛を誇りました。室町時代になっても、竹矢町周辺が出雲国の中心地だったことを示しています。中海からよく見えるとともに、港湾近くに立地したことに大きな意味があったと考えられます。

安国寺鐘楼（松江市竹矢町）

5．中世日本海水運の中核となった美保関

宝治二年（1248）「蔵人所牒」から　蔵人所とは中世には天皇家のさまざまな機関一切を取り仕切る重要な都の役所です。牒とは他機関への通知のこと。つまり、大きな力を持つ機関から出された重要な通知の一つがこの「蔵人所牒」で、影響力が大きいものだったのです。

この古文書には、西国の門司（もじ）、赤間（下関）、嶋戸、竈戸（上関）、三尾（美保関）の港での関銭（通行料のようなもの）徴収の停止指示が記されています。当時の西日本海の海運のなかで美保関がとても重要な港だったことがうかがえます。特に日本海側では九州から長門を経て初めての大きな半島であることからも、博多や対馬などの大陸貿易の拠点と都の京都を結ぶ交通・交易の中継地として発展していたと考えられます。

「蔵人所牒」に出る５つの港と航路概念図

外海と内水面交通の結節点としての美保関　美保関は年貢米が京の都に直接運ばれるようになっていく古代末（平安時代後期）から、日本海交通の要港として徐々に発展したものと考えられます。それが中世に入って商業交易が活発となり、特に西との通交が盛んになるとさらに重要度を増していったのは前項でお話しした通りです。東は京都と結ばれた小浜（福井県）、西は大陸との交易が盛んに行わ

れた博多や朝鮮半島との交易で栄えた対馬宗家を結ぶ中継地になったわけです。

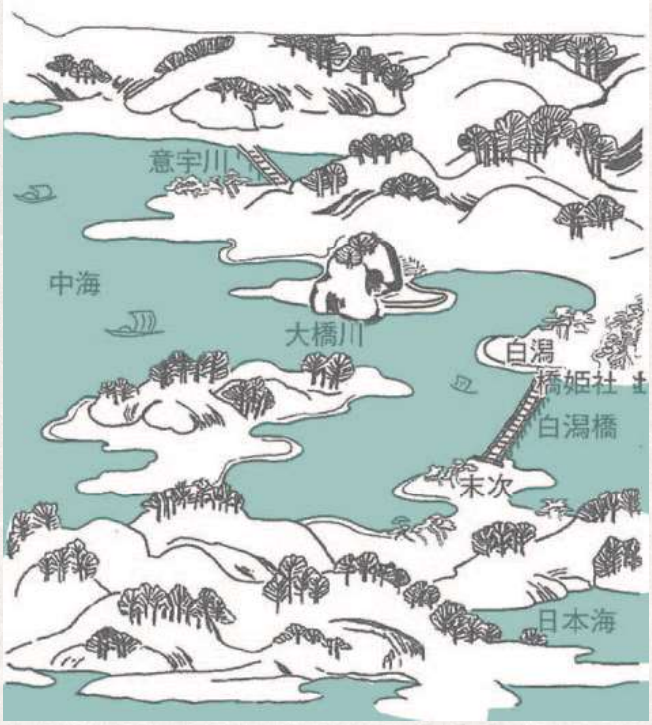
一方で、美保関は外江関（境水道）を通って出雲国の内海につながる内水面交通の基点ともなりました。宍道湖・大橋川・中海に点在する港との水運は、出雲国にとって交通交易路の幹線となり、内部的にも美保関の重要性は増して行ったのです。内海からは、河川を通じて中国山間部にも水運が網の目のように広がったことは言うまでもありません。特に府中や八幡荘があった馬潟・竹矢から揖屋にかけての中海南西部との航路は、往来が盛んだったものと考えられます。

現在の美保関港周辺

6．中世松江の港町形成

「大山寺縁起絵巻」を読み解く　下の図をご覧ください。応永５年（1398）に描かれた「大山寺縁起絵巻」（東京国立博物館所蔵）の一部を、わかりやすくトレースされたものです。北側から松江市付近を望んだ部分で、中海・大橋川（松江潟）・宍道湖・日本海の水域（青く塗った部分）がとても広く描かれています。14世紀終わりごろの人々にとって、出雲国沿岸部（松江周辺）は水域がとても重要だった、という認識が表れているように思います。

帆掛け船がたくさん描かれていて、船の往来の多さを伺うこともできます。注目すべきは、図の右のあたりに橋が架かっていることです。位置関係から考えて、南の白潟と北の末次の間を架橋しており、白潟橋と呼ばれた現在の松江大橋のルーツとなる橋を表していると考えられます。橋を架けるということは、南北を陸路でつなぐことが交通上重要だったことを示します。おそらく14世紀終わりごろには、白潟と末次には町が形成され、そこを起点に中国山地部や島根半島部に物や人が行き来したのだと思われます。古代から中世前半期には記録に現れることがほとんどなかった白潟・末次に、町が形成されたのはなぜでしょうか。



「大山寺縁起絵巻」のトレース図と水面
（長谷川2013文献から引用一部改変）

砂州の形成　大きな理由の一つは、その地形の形成にあります。白潟と末次の地盤はいずれも砂です。もともとは浅い内海だったところに、砂が溜まってできた砂州の上に立地しているのです。砂州は、宍道湖に流れ込む川の水が引き起こす西から東への水流や、冬の強い西風による波涛が、川が流した砂を下流に押し流し、現在の宍道湖の東端の両岸に堆積してできたものです。近年の研究では、古代には日本海に流れ出ていた斐伊川が、13世紀ころには東流して宍道湖に流れ込んでいたという説が有力になってきました。そうであれば、中世に急激にたく

さんの水が流れ込み、砂州の形成を一層促した可能性があります。白潟砂州は、袖師町あたりの低丘陵から地形に沿って南北に伸びていき、末次砂州は国屋町の低丘陵あたりから東西に伸びていきました。

白潟地区の発掘調査で現れた砂州の砂
（砂州の上に中世の生活層が堆積しています。）

砂州は浅くて穏やかな水面に面し、舟を着けるには絶好の場所でした。また北側の末次では亀田山のふもと付近に陸地を広げていき、町場を形成するにも適していました。このようにして、宍道湖の東端は水面が急に狭くなる瀬戸ができ、東西の水運や物流を差配するボトルネックとなりました。中世前期まで同様の働きをしていた馬潟・朝酌地区周辺とともに、出雲国の交通幹線の要所になっていったのです。

発掘調査が証明した白潟港町　島根県埋蔵文化財調査センターは令和３年度から、大橋川拡幅事業に伴って、白潟の一部の魚町、白潟本町、八軒屋町、和多見町で発掘調査を行いました。松江大橋の南詰周辺にあたります。

発掘調査を進めると、まず近現代の生活面が姿を表します。その下には江戸時代の生活面が3～4面重なっています。300年のうちに何度もかさ上げをしながら町を更新したのです。そして、堀尾氏が築いた城下町を形成した面の下には、中世後期の堆積土が溜

白潟地区の発掘調査
（砂州で周りよりも高くなっている先端部を石で護岸を形作っています。）

まっています。その下から、砂州の砂の上に造られた15世紀～16世紀の護岸施設などが発見されたのです。

砂州の北端部付近は、大橋川の水で浸食されるのを防ぐために、石を積んで護岸をしていることも分かりました。このような川に面したところに船着き場が造られて、荷の上げ下ろしがされたのでしょう。そして、現在の白潟本町や魚町付近には、町場ができていったものと考えられます。どこかには、大山寺縁起絵巻に描かれた白潟橋の痕跡も埋まっているものと思われます。

このように中世の終わりごろには、橋を行き来しながら南北ににぎやかな町場ができてきました。松江城下町は、江戸時代に堀尾氏によって形作られ、京極・松平氏の時代を経て発展してきたと考えられがちですが、その土台は中世に形成されていました。その源泉は宍道湖・中海を結ぶ内水面交通と港町の発展にありました。今後の発掘調査で、その歴史が明らかになっていくことが期待されます。

中世末期の町場と農村（名）
（松江歴史館蔵）